新續古今和歌集　下

特別
へ4
8099
21(2)

ヘ4
8099
21
(2)

< 2001-045 >

[illegible][illegible]田文庫

新續古今和歌集巻第十一

恋哥一

前参議經家家にて哥合し侍りける時恋哥の中に

藤原清輔朝臣

わか恋はあまの苫屋の[illegible]

百首哥奉りし中に初恋を

雅永朝臣

まてしはし[illegible]

けふそしる[illegible]

[illegible]

初恋のこゝろをよませ給うける

後小松院御製

なとり川[illegible]袖のみなれて[illegible]

千五百番哥合に

正三位秀能

身にはまたしらぬ袖をもあやなくて[illegible]袖の[illegible]

永和百首哥に

後押小路前内大臣

[illegible]おもひの初草[illegible]

後法性寺入道前関白家百首哥に

正三位經家

[illegible]

文保百首哥奉りけるとき

前僧正雲雅

いつまてか山の桜にかゝる時雨のゝちをつれなき色にかへれは
ちらめ先急乃仙伐　土御門院御製

なかひとむら松の木葉はかる時雨志くれとふりそへてまさらせん
題しらす　前摂政左大臣

をしむとはいつまてむかしをすみけん世の中の旅ねもひさしかるらん
前大納言俊定

一しくれして風さえ渡る後のわやしきたにひとめてもえぬとさね
石清水社に奉りける哥の中に
按察使公保

みたれ芦のかれ葉にまさり舟のやそおもふはかなさ志つか哉

拙ひとをわたる女乃たもとかなわかれまさるへきはうちなみ
能因法師

くにゝそ君まちとしもとさけてゆへてなかひそめてさ
恋哥の中に
源　範政朝臣

ひとめみしかさらのを経たる年のたけなにゝ長くなるらん
貞和百首哥に
竹林院前内大臣

なかひそむ心の色をひとしかなしいくとし神のまち志つらん
貞治百首哥に寄月恋
従二位行家

こゝめやかのゝかみのうへ月の旅まくらへて恋すてまつらとい
恋隣女といふことを
皇太后宮大夫俊成

志賀の宮の桜花咲かは風よつけよもれはなつ人を

百首哥よませ給ひしに寄風恋

直明王

吹風のたよりあらはとめくみぬる人の名をいかてしらせん

正治百首哥に　三条入道左大臣

なふるは紫かりにし恋をもせんたちの名のみきゝ恋路の称

題しらす　従三位俊長

あふら絶てゆくとしにそなりぬる恋のたゝちは思ふへかりけり

延文百首哥奉りし時寄燈恋を

権中納言為重

忍ひもやいかに雲は志らすなからむかけしいかに燈を

建長三年九月十三夜影供哥合に寄燈忍恋

山階入道前左大臣

萬世に袖をかゝけよ燈をともせよかゝるとも人のあふ世

恋哥の中に　法印継昌

いかにせむかの袖にそふそてにもかゝけ人のおもひのかけの燈を

貞治百首哥奉りしに寄閨恋

常盤井入道前太政大臣

人めもる名にのみ閨にかれぬるを色もあかぬいさよひ

題しらす　寂照法師

みちのくの衣の関の人もまた涙をさそふ夜半の月かな

忍恋の心を　侍従為敦

いひそめしその暁よりせきあへぬ涙もろさをまづしられけれ

寄枕恋　　三善為連

枕さへうきあふせには成にけり人しれずぬらす涙に

春恋といふことを　　蓮生法師

ちるさめや野辺の若草おしなべてさてあへぬ雲井の春を恨む

建保名所百首歌めされけるついでに

順徳院御製

なかなかひのもとなる池のいろぬはちかぬあやめの跡に[illegible]

水無瀬殿恋十五首歌合に夏恋を

後鳥羽院御製

さてもいかに小笹のきはのあやめ草やめもはてぬ袖の[illegible]

洞院摂政家百首歌に忍恋

正三位知家

さてもまた人目の関のせきかねて絶ぬみさへやかはいさや[illegible]

たゞ一[illegible]

六条院宣旨

ひきかへていとゞ身をもつまずは恋しきものを歎かましやは

難しゝす

修恵法師

うしとても思ひのまよひも袖の[illegible]さへかはるかな

貞和百首歌奉りける時恋歌の中に

左兵衛督直義

色にこそ[illegible]ぞあらはれぬ袖の[illegible]

文保百首歌に

弾正尹忠房親王

いまそしる瀬々の神もしらなくに人やしるらむ

寄舟恋といふ事をよませ給ける

今上御製

しら浪のよる家の浦によする舟のかけぬふからふねなるらんと

題しらす

明覚法師

しれぬ思ふ山の下わる時雨しらるゝ松にいそしる音(?)

前大僧正義運

行かへれなとなくさめていとゝ思ひの山のしたなら

百首歌たてまつりし時寄山恋

前大僧正満意

ひまもなく思ふ思ひの山の下河のいつまてそ年ふる袖のかはくまもなき

人はむかしする恋といふ事を

皇太后宮大夫俊成

あさくらやきのまろとのになのりをそ我人しれす思ひそめしく

恋歌乃中に

中務卿宗尊親王

うらむまし我身の人めをつゝむとてなけくほとにはとはぬ月日を

忍恋を

前大納言為家

消ぬへき露はかりにも思はれす下の心の乃みちはい

後法性寺入道前関白家百首歌によみ侍ける

藤原資忠

いとゝしのひわひぬる人乃袖のうへの思ひのすゑしものにそよしの露

題しらす

源興貴

人めのみしけきの露にぬれ袖をほさぬ恋にもみさまそしらぬ

洞院摂政家百首歌に

藤原信実朝臣

さそとゝ友まつにしはしさ夜ふけてまたぬ露をそかはしかけ

寄露恋を

大納言成通

よひのまは草葉の露のましたともしらてひかるたよりいろそのかん

寄草恋といふ事を

藤原秀茂

みつさかのあはれ浅茅の露にさかふにそめ袖たにしらへ

恋哥の中に

津守国助

しの薄ほにいてぬるの露わけをかくれしかつれは袖をみえぬ

源頼益

かはらてかゝるへしとは思ひきや此花の袖とたのまさ

建仁元年九月影供歌合に寄池恋

如願法師

あはれとも池の水草にしつみける道のなさけそ袖の影さき

題しらす

権僧正永縁

池の名のみなそこふかく思へともいはてすくさん年をへてさん

忍恋を

兼好法師

みさひえの底のみくつの下にのみ志らぬ思ひへよ嬉しかるを

隠在二人恋といふ事を

法印実甚

袖にそふかりのたもとに涼しさや、そのかみの風もひとつ宿るさ

千五百番哥合に　　後鳥羽院御製

足曳の山におはれはよりぬれはいつもまさくの

わか恋は人をすけれはあまのあさ藤露もとまれ　　後京極摂政前太政大臣

寄草恋を　　登蓮法師

涙にも袖とおもへは嵯峨山の岩にせきけれ袖にはいかにとも

後小松院かくれて数をさくりて五十首哥つかうまつりける

中に寄河恋を　　成恩寺関白前左大臣

しらせはやその世をふかく吉野河岩にはまいる浪のいはぬ思ひを

寄海恋といふ事をよませ給ひける

後小松院御製

いつはりもかよはせの中に松かねの袖と袖とにやまぬへん

永和百首哥に　　前中納言實遠

ちる花のいまは雲井の露なれやしられぬ恋の袖の涙を

貞治百首を詠進させてまつりける時

前大納言資季

あしひきの山のをかよふあまの雲の松のひさしにかとも思ひしらすや

題しらす　　按察使資平

あさなりや行あかの秋の末の雲はきえぬへくまつにひき

百首哥めされける時に寄木恋を

今上御製

人しれぬなみの袖のほすまなくつれなき人にかくてこひつゝ

文保百首歌たてまつりける時

前中納言有忠

わすれてもぬるゝとみゆるは我涙なれてそなれし袖のしつく見

二條院位におはしましける時百首歌奉りけるに

太宰大貳重家

玉藻かる伊勢のあまならねと袖はぬれつゝ人をとふあはれかなし

題しらず

源通祐

恋のあまりに忍ひまさるも思ひきや袖はうつるいろにそ見えん

家百首哥よみ侍りける恋哥

洞院摂政前左大臣

思ひあまり堰かねしほとのなみたこそ袖の色にはいてゝ見えけれ

相生恋忠恋といふ事をよませ給ける

後小松院御製

志らせはや我身の袖のなみたをもつれなき人のよそにのみ見て

信實朝臣

志らせはやなかなかの袖のなみたかなかくそとふ人もあらは

前參議經忠

思ひのみ袖にあまりのなみたかなそのいろにこそ人はしるらめ

一宮紀伊

人しれぬ恋に袖こそくちにけれなにとてかくはつゝむ名をたつ

よみ人しらず

あふことは袖にあまれるなみたかなかくとはしらてすくすつれなさ

思ひくまなかりし心への内はいつの世まてと深く
こゝろはつかしきかな　大貳三位
露ふかきをしほる袖とはしりなから秋の露を秋の風にまかせはてなは
人の戀の哥よりまさらん
前律師永觀
きえはてゝ露も涙もなきにしも雲かゝる空の果なき秋
哉しく涙
法印實性
うき人の心をしらぬみにしもおもひそめけん哉しき
亀山殿十首哥に　前大納言爲定
なかきよのはてしなくもみやまきの枝をる神の涙のさは
寄玉戀といふことを　權大納言爲遠
きえぬへき袖にはなちて緒の數は涙のしら玉
百首哥奉りし時おなしこゝろを
權中納言雅世
戀ゆゑとおもへは袖もおくれなきなみたの玉やまたなれん
建武元年八月十五夜内裏にて五首哥たてまつりし時の
哥たてまつりし時寄月戀といふことを
藤原永緒
せきかねて月みるかけも涙さへあまれは袖に影をたのまし
應安六年九月十三夜仙洞にて三首哥かうせられけるに
対月戀
前中納言基隆
絶ぬ人の袖の涙とおもふまてはやと見えつゝ月そやとれる

宝[illegible]院殿左大臣家にて三首哥よませ侍りける時

法印經賢

月をこそみるにはあかて袖ぬれて我いかにせて人をこひまし

題しらす

後宇多院宰相典侍

なかなかにまちもやみなん月みるに空たにもすまぬ袖はぬれつつ

洞院摂政家百首哥に　思恋を

光明峯寺前摂政左大臣

忘れぬはさそなきにこそ夏草のしけきおもひに時雨そふらし

宝治百首哥に

参議隆親

なかめしそ空のみとめし思ひにも山は霞の山は松そ時雨る

恋哥の中に

藤原基任

白露もをきてふ山の下染よまちかねぬなかけさの色やかはらん

建保三年同六月内裏哥合に

後久我太政大臣

なけきあまり袖は色こきくれなゐの涙そ落る竹の下露

貞和百首哥に

竹林院前内大臣

かはらしといひし人をも思ふかな我そかはらぬ人そつれなき

文保百首哥たてまつりける時

法印定為

うちはへてなきつつ袖の露そへてしほれてやまぬ人をこひつつ

思恋の心を

源光正

いまはとて人のこころをたのまねは命なりけり

弘安百首哥に　前大納言雅言

冨士のねの煙も雲も年ふりてきえぬ思ひの程そしらるゝ

題しらす　源高国

山乃端の空もひとつに煙たつゆふへの程そ言葉にもなき

源義将朝臣

とはれても思ふ月のかほるらむ猶あはれとそなかめしられし

思久恋を　平光俊

松とてもいはれぬそとなくさめてなからへてすゝ我そつれなき

文保百首歌に　後光明照院関白前左大臣

つれなさのかきりをいかにみむとしてたのみし恋の命なりけり

後小松院にて人々に題をさくりて千首哥奉りける

寄時雨思久恋といふ事を　入道前内大臣

袖乃色は我にもあらしそれやらてよそへてなるもの世の時雨を

普源なき拾て

新續古今和歌集巻第十二

戀歌二

千五百番歌合に　皇太后宮大夫俊成女

しられしなたえしむすほれ袖にのみ思ひきえなはもらぬなみたを

法性寺入道前関白太政大臣家歌合に忍恋と

いふ事を　前中納言雅兼

さりともとおもふちかひのよはりゆく涙をたにみせてしる恋をせん

藤原為忠朝臣

思ふゆめにもしかすてもしら雲のあとかたもなき恋をするかな

不逢恋を　前中納言定家

幸かあひし星のあふせもいまもまたみぬよりさきに秋の夕くれ

永和百首歌に　関恋

後普光園院入道関白前左大臣

うき中は宮井のゆふ郷ともきてらやそとさへさりけり

しれしも

紀俊豊朝臣

とゝめえぬ涙は袖にせきとめてあまりはゆくへしらぬうき道

後京極摂政前太政大臣家百首歌合に

前大納言忠宗

なにとなくまたみぬかたはしりなからいかなる旅のたよりにそまつ

寄鏡恋を　前参議雅有

山の井のあさきかけたにうつさはやみぬ人ゆゑにまよふ心を

寄馬恋といふ事をよみ侍ける

後小松院御製

たか影をうつしてみよや山高み清き河松のかけも見えてそ君にさ

永和二年百首哥よ見恋

儀同三司 資

かりにたに逢見しの程をひとすいみるめに海もかひ屋ならん

松のしけきを

津守国夏

あまつ風せきのあさ此磯の塩もみるめなかるゝいまそいする

寄草恋

雅成親王

上の河海の松さへ煙あひぬ前草にみるめのおもひてあまの塩

寄藻恋

藤原秀茂

かのうらをかへしみるめのおもひ草しけるかけてもあひぬ日もなし

恋哥の中に

章義門院

あふことはだにはかなき契かつらきのはるかなる名そ

つまならぬ人のことに女郎花まよひけく

菅原範永朝臣

一葉ふく桐てそのあかつき秀けさ野への袖はぬるとも

嘉元百首哥に不逢恋

前大僧正道玄

さゝ浪やよるへもしらぬ成なからあふ名かてらのあさ材舟

文永二年九月十三夜亀山殿哥合に松恋

按察使資平

めくり逢ふしるしとは志らすひさしき常のかそへ(?)たえすき恋すはよ

千五百番歌合に　後久我太政大臣

よかつるあふ夜はかなくおもひねもむすびし涙のあかぬ玉のを

源家長朝臣

夏にても露もなくて(世イ)昨日の衣のかへし袖のうへの浪

弘長三年内裏百首歌奉りける　従二位行家

をと羽まで(ヤイ)すゝわきさしてしばしこそあまてかへるあさ

洞院摂政家百首歌に恋をよめる　皇太后宮大夫俊成女

さもあれ袖のなみだのかはきえてかへる衣のみづら(?)の露

源家長朝臣

よそにしも結ぼほれぬるひとすぢにたえぬも玉のあさき涙も

弘安百首歌に　権中納言公雄

あはれらん涙の玉のをと絶えてあまたやさそひて袖ぞ乱れん

新玉津嶋社三十首歌に　権大僧都良春

いかにせんあはぬ月日の玉のをのたえぬものとはおもひ(人)つる

貞和百首歌奉りける時　入道贈一品親王尊圓

あふまではいかにとおもふ玉の緒のよわりはてぬるやなぞとなるらん

寛治百首歌に寄玉恋　入道二品親王道助

おなし事といはゝ松風吹よりも枯風つらき夕暮の空

題しらす　読人しらす

かりそめのなさけを宿に頼しも此ころは人をもとふとく

借人名恋といふ事を

前大納言為定

いかにせむたゝぬ名をたにかなしみもつらき方の人をたのまむ

恋歌の中に

中務卿宗尊親王

おなし事いはぬ猶こそ恨みけれ人の心やさはさる中そうれしき

権遠房

身をさらぬかけのみそふる思ひせは中の心の塩竈の浦

大納言師氏

歎つゝかつ〳〵袖にうつるらむ涙は宮の浪をこそみれ

新玉津嶋社三十首歌に不逢恋

慶空上人

あまての関の岩かとにゆるさてかひなきおもひなきかな

延文二年百首歌に寄関恋

前大納言公蔭

老村の水をは袖にうけなからいつも人あふさかのせき

宝治百首歌に寄松恋

正三位為継

見しはこれ杣山坂とたのむへき心のうちの岩ね成けり

前大納言為氏

いとゝ我わか菜の露はつまれさ中やけりあかなるらん

千五百番哥合に　右大納言忠良

恋まさる袖のみなとに浪よせていく夜かさねの数はかくらん

寄逢恋を　よみ人しらす

あふ事をなほさりかほにおもひつゝあまりの中を浦のよせてて

不来恋といふ心を　前大納言経継

深きのとも里とはきけとなき別涙子あまるもなれ契式

詠しらす

いさ河に渡りそなひさしあまての浪はさかいさら尖

寂縁法師

正三位成國

独寝の床さへとしれ契かくあはぬ身そ我とかさね侍る

右衛門督忠基

かゝる身の中かれし里は名のみにてあひ見ぬ恋そくるしかりける

洞院摂政家百首哥に不逢恋　後九条前内大臣

あふ事はいとゝかゝる夢路にきたのみなかれとまりつゝけん

寄橋恋を　参議長遠

明ぬともたのむも一夜の契にてたれかはしらぬあかる志らし

源兼氏朝臣

とたえたるいはまの橋とこゝろはれぬ中の絶なきかり

貞和百首哥に　後鈞源寺前内大臣

されはとてかゝるうきにはつらくしらさい人のあはれなさそ思ふ

右大臣によませ侍りし新玉津嶋社三十首哥に
左近中将定親
これ秋のたひね秋のうつろひし枕の露乃かを聴かな
嘉元百首哥たてまつりける時
後照念院関白太政大臣
あはれをさすかあはれと秋もたのむかなすゑわたりける命なりけり
戀哥の中に
三善元秀
月日のみうつりにけりなかつまられさとの花のみかはりて
後八条入道前内大臣
難つとひら我かは月日はへまきれのこさゝなきぬる人の恋つゝ
寄竹恋を
よみ侍りし
うきなのみたちかへりても世にてこそ一夜たになひきこそいはむ行
建保三年百首哥に
後醍醐院少将内侍
此世にはつまふきこえぬ方をたのみてなかくやまぬ座には偲はん
題しらす
浄空法師
むかしあらは我をつれなき方と成くこしむ世に人はありしやす
楠重吉
此ころはいけれむすひ後すてしむなしき中比契そをそら
建長百首哥中に
従二位為子
恋つみんはことかれし後にこの世まてさへ拘やすらむ
貞和百首哥中に
中宮大夫公宗母
此弁きこそあはくこれ世をさかりてたらつまなさの名残の心ん

戀哥の中に　　清慎公

見えもあひみぬさきの朝露の消ぬさへにもあひ見てしかな

高田女王

この世にハ人ことしけし世なりとも何とか我はせきてつゝまん涙とも

せきかねつ

在原業平朝臣

今まてハ我恋しさはあはれさへいつまての命なられぬ名を惜せん

不逢恋を　　従二位為理

恋わひぬ後も猶そ恨みぬる人のうさ思ひなけくせは

聞もら涙　　法印村基

物思ふと見えて河せさすまての（さん）さへ恋しなん後世とらし

前中納言為相よませ侍りける日吉社十首哥中に

前参議雅有

しのふそはいはてやむへきおもひかは我さへ人の世をしのふらん

文保二年九月十三夜亀山殿哥合に

権中納言公雄

しゝせてや逢にかへんとはかりしに命のつれなきいのちなりけれ

恋哥の中に　　三条入道左大臣

恋しなはあはれとはかりおもはなんのちの世まても思ひやすらかは

新玉津嶋社三十首哥に不逢恋を

頓阿法師

おもひ入身こそなれぬる風もつまかきりなき人のおもひいらすは

宗久法師

身をさてハ我こそうきれなかめのこれつきせぬいのちなからむへひおもひなからん

前参議経盛家にて歌合し侍けるに

藤原資隆朝臣

恋しなん程とへも君かゝつれなき身をおもひしられん

永和百首歌よ

後深心院前関白左大臣

恋わひてなほつれなきやさきの人の心なれぬ命なからなからん

題しらす

平氏朝女

恋ぬといひてもかはる年月の数やへりてさかはるらん

平康頼

恋しなは風となるへき後の世とたのむはかりそそへぬまされ

藤原有高

うけは我とつれなくへてゆきしものそてをそふかん

平師氏

おなし世にありときかれしつれなくてなほもと我や人の思はん

嘉元百首歌に不逢恋を

前大納言経継

おなし世にありと聞さにつれなさに恋しなん身はそれそかなしき

貞治百首歌に寄雲恋

山階入道前左大臣

あはれなと小夜ふかく雲ゐるそよや人をおもひきりなん

題しらす

後押小路前内大臣

いかにせん忘られぬ雲ゐのおもかけにつけても猶とふひとを

今ぞかしこく世にうつりつゝまつる

源有房

うれしさは竹の園生につかへつゝなほ下の枝のひかり

寄竹祝といふ事を　明魏法師

歌の林やさかえんおのづからひかりそふ君がさかゆくよりも

後京極摂政家百首歌合にたのしみを

中宮大夫家房

たのしみは浦にあそぶ人と共に千代まで秋にさらに逢ふ道

左大臣よませ侍りける新玉津嶋社三十首歌に祈恋を

左衛門督実雄（雅イ）

法の声のいやましにあふせも我にまかせて神はとはじを

むかしを　民部卿為明

すめのあはれにうかみけることはりの昔の道の末のあはれ

法印慶運

今さら思ふも我こそかなしむとはいさやうきへの秋風ぞ

貞和百首歌に

入道贈一品親王尊円（たい）

うき世をもけさはいとはん行末やいつその浮世の法の声ぞ惜しむ

後照念院関白左大臣

あかつきも今ならへいかにうしや我をはなれとなりはてぬらん

乾元二年内裏五首歌合に依恋祈身といふ事を

従三位為信（為）

逢事をかけつなれし命をはなのあはれにさしそへいのちを

贈従三位為子

なからへてあれはそ梅を折身をもあはれんまてとなかめける

恋哥の中に

前大納言實教

みそきせし河の瀬ことに小瀬ことにつまこふるきみをまちやかねん

新玉津嶋社三十首哥に新恋を

左大臣

わきてそのおもひはなしや舟泊をむすひかきたる名をやたてなん

石清水社に奉りし哥の中に恋を

藤原資任

貴船川みなかみ袖をくらぬまに浪乃声にもしられやはせ逢野ゝ波

定顕法師

きえ返りあふせを頼むみそきこそは涙の玉そちりのまに

寂真法師

恨するかたの中川の大ぬさをつけのからせやあふ瀬なるらん

永和百首歌に

侍従為敦

御秡をはいかにかけん大ぬさのなかれよる世もしらぬ身乃契は

従一位宣子

ゆふたにかけてそいのれさ契ゆへ袖をもうらみぬ程そしらるゝ

恋哥乃中に

後八条入道前内大臣

恋せしとせしみそきにそうきなからおもふ世にしも契哀乃涙

玉津嶋社に奉りし哥の中に新恋を

権中納言雅縁

おのれとや小松もひきてうへしけん此松かけの恋しさよ(ゆかり)
松中宮を
兼好法師
いかにせむ神のいかきの松ならて名をのみなけき年をへぬらむ
澄覚法親王
住吉の松ハいのちをかけてみきたらしさいはけた(?)恋しら(?)をはや
恋哥乃中に
前右兵衛督教定
住吉の松のことをあはれとも思ひさためなきおのかみの老(?)きゆく
建長二年三首哥めされける時恋の心をよませ給ける
後嵯峨院御製
あはれとも君こそまつのみとはむまつまて(?)にかはるなるらん
駒不遂恋といふ事を
中原師朝臣
よろつよのいろも哀もかけつくし中にこえたるまつや成むし
藤原隆信朝臣
千五百番哥合に
朝夕にうゝるはまつの影をみてなれにしかけもさそなつかしき
平親清
雲井に恋を
みつかきのふかきちきりのなかさえて(?)あはてそなれの山の井の水
弘安百首哥に
藤原為顕
きみまちしなこりのまつをかはるともいつまてかはる秋のゆふくれ
藤原為忠朝臣家百首哥に待恋といふ事を
寂念法師
吉野川いはきりとほすみなかみのたえぬちきりもはかなかりけり

嘉元百首の内 述懐を
従三位頼政
はかなくも世をあはれとは思へとも世をうけかたき身こそつらけれ
題しらす 素性法師
今さらに思ひ出ても猶何ならむ袖の露けき秋の夕くれ
貞和百首の内 左兵衛督直義
うらむとも何の恨みか有へきを身にはさそかなしかりける
前大納言為定
位山さてもや終にたのまれん後の世をのみ願ふ身なれは
前大納言実教
契りおく末の世までのあはれさへ思ひとかへる事そ悲しき

永和百首の内 崇賢門院
たのむそよ春や昔の人の世の心もしらぬ身にはあれとも
新玉津嶋社三十首の内 述懐
後深心院前関白太政大臣
玉の緒の絶えなむ世まてかくはかり人の身をおもふこゝろのかなしさ
述懐といふ事を 二品法親王尊胤
世にすめはなにをなけくとおもはねとうき身をもちて世にはすみけり
文保百首歌に 前中納言有忠
世の中もとかくつらなき身なれはうきは世をのみ恨みつる哉
正三位隆教
おもひ入る身をは世にしもおきなから花に木の葉のかゝる比かな

建仁元年十二月後鳥羽院より五十首哥めしける時寄

草恋

後京極摂政前太政大臣

風そよくかたのめて出しおもひは野中の清水のかけにこそ見ゆ

建保三年六月内裏哥合に契経年恋といふ事を

従三位保季

詞をはてゝまたあさ茅原に成ぬるをたのめしやとも今は忘れ

順徳院御製

里とほみいく秋を契そめしこの山かけのまつとせしまに

左大臣家かく三首哥よみ侍ける時に

権中納言雅世

なからへてもしひとりやうきをしもなほ待わたる命なりとも

権大僧都兼孝

忘るなよ清見か関をかけてこそ頼む浪にもゆるしそ

従二位為子

忘れ浪の寄るへの契を忘るなよ又せとこふなれ身をすまを

寄山恋を

栄仁親王

年をへて待ちしより末を頼むにもたゝ山のをのこそ見ゆ

洞院摂政家百首哥に不逢恋を

正三位成実

さりともと我山なかのつれなさは契りもなくてこそすくれ

恋哥の中に

後醍醐院少将内侍

いはてたゝ思ふ心をわかやなしや乃ゆくすゑとおもへとも
なとひあさ世紀

新續古今和歌集巻第十三

戀哥三

題不知　　曽祢好忠

たのかなる人へ綿かよはゝ見せてこそしらるゝやみちにゆふくれのそらは

戀哥の中に　　源和氏

ねてもさめてもひとりやなかむ出あふへきまさしきゆめのなきをしも
うちへてよりす

ことのはもさそなれん事いまさらふの末葉の風の秋のけしき

蓮生法師

萩の葉をさそふわかれのみのあはれ枕乃露をそへてふ秋の暁

貞和二年百首哥たてまつりける時

月その影をうつすにたちぬる葉とおとはまさりて
後三条前内大臣
水無瀬殿恋十五首歌合に暮恋といふ事をよませ給
後鳥羽院御製
ゆふ
いかさまに秋あまるこの袖の露に月そのまさにむかふ袖の
松下歌合に寄風恋を
参議雅経
今はたゝ秋あまるこれさへ秋深くまつとせしゆふ松風の恋
宝治百首歌に寄雨恋
鷹司院按察
後はたゝえやはもれつゝたのむ秋ふけぬ雨の行さゝ
弘長三年内裏百首歌におなし心を
従三位重氏
見ぬ河にきみか秋の雨さまされわたるさへ袖とへやまさらん
題しらす
称名院入道内大臣
いとゝまたそれともせぬなくさめにひとりむら雨の夜はの
百首歌中に
前摂政左大臣
ねぬ夜はの我やゆくへのひとり雨ふるきぬかはをとこそまされ
前右大臣
うたゝねにまた秋ふけぬ雨とさそふにかてなきさめかせん
藤原雅親
ねぬ夜はをとふ人ものうきはそれかくれきさむしろ雨乃そら

恋哥の中に　藤原雅朝々臣

かはされぬ契をなにとおもふ人のこゝろのはてやまちぞ南

藤花によする恋を　祝部成仲

藤波のかゝるときはの紫を松にかけてや日数へぬらん

題しらす　法印実為

いつとしも人の成てこそ見しかたみのくれなゐ

不待恋といふ事を　藤原直親

いつまて我やあはれと人の心のおもひけむとおもふかさらん

恋哥の中に　前権僧正雲雅

絶はつるにやとけぬらんなるも世は物をひの月影

憑明後日恋といふ事を　大宰大弐重家

恋さはれ今はさらにはこの世をそむきて二世までひとり待よや

契待恋を　権大納言満親

とふ秋のつゆのふれはそはかはらしとひとりそ松のむかし

題しらす　祝部成光

この秋もたのみつゝたのむ葉やいたつらにあらぬいのちの世のことゝ見ゆ

兼好法師

あふ人をたのみすくにいまはいつよ浪にちきりなるらん

連夜待恋といふ事を　権中納言雅世

来ぬ人をまちつくしてもなほたのむ心はよそにたのむものかは

貞和百首歌に　前中納言雅孝

待とおもひしをすくしてまれにこそはつかにきく人のとひこしもなけれ

入道二品親王尊円

定めなき我身ひとつをなけくかなかくてもしつる世にしほれつゝ

左大臣よませ侍りける新玉津嶋社三十首歌に　権大納言実量

今さらに我まちかほに契らぬ人へやとはれまし

百首歌奉りし時寄関恋　藤原為季

とひかはすこともたえぬる中にこそせきのしつけさもまちわひぬ

権大納言為遠

なかなかにへたてし中の逢坂は実ちかひゆく世にしあれは名とそ

題しらす　賀茂保憲女

かはりゆく人のかたみもむかし相坂にいりぬる色のみえん

源頼之朝臣

今はまたよそにみしかなと契りける世の中をはかくてありなん

弘安百首歌に　後山院前内大臣

契しをまつとせしまに人のいかにかはりぬ身をしるもうし

百首歌奉りし時　藤原為之朝臣

今さらにかはるをうらみてもちきりしことはのつゆやのこれる

永和百首歌に　従二位宣子

契りしもおもひしをいかにやたのまれしもこの世の契の末のあはせ

契不来恋といふ事を

大納言成通

まれにみる夢ちにこぬ秋の夜をやまちわひし山の志河くるかん

文保三年百首哥に

従二位宣子

浮ねせし高津の枝をわたさすら初時雨てぬすはきれたち

前中納言為相

玉さへ堅き葉をも又浮ねせしまゝのまとつきわく

中納言為藤

こゑへのうさきとも志らぬ鐘の音に浮ねとまちてはら見つる

恋哥の中に

俊恵法師

たのめをきし人をまちわひてつきの枕の秋そ又をまつ夜のをきそ結ふらむ

待恋といふ事を

宗尊親王御製

ためになきあかなせと秋のよすからそらもなれ見ぬ人の秋のよき

題しらず

参河内侍

たのめしを松の葉ともし稲荷てなけきあかせつ神の宮を

新玉津島社三十首哥に待恋

頓阿法師

いかにせんあふ事とかくてまちし結ひにし人のわか庵のまつを

嘉元二年伏見院に三十首哥奉りける時待恋

後照念院関白太政大臣

夕されはしかのねたかきをのへにて月をかつかしらむ

恋哥の中に　前大納言忠良

あはれなりたのめぬ月の影をこそしらすもまちしものと見る哉

秋恋歌とてよみ侍る　梅宮仲朝臣

なき月のまちかねたるうき人はおもひぬと夜をまつ

題しらす　鎌倉右大臣

待人のこぬよの梅の下荻にふいて袖さむき恋にもする哉

建保六年内裏歌合に冬夜恋　前参議忠定

如てまの袖のならひにしかもひとつくし袖のまつらん

後京極殿にて十首歌よみ侍る時祈逢恋

丹波忠守朝臣

年布祈りし神はいのりし逢瀬こそなれぬる中となりけれ

なかりしを　法印経賢

うきまの契そおもひみぬ縄なひきて袖のうきくもる

寄関恋を　入道一品親王永助

契あれはけふあふ坂もこえて行関のさゝれともなき

後法性寺入道前関白太政大臣家百首歌に初逢恋の心を　皇太后宮大夫俊成

たのまれぬ契りのほとを見しあひにそめてくれぬらむ

俊恵法師

あふ事は夢のうちにてわすれしかは今ははてはむる袖をいさりしを

文保百首哥に　　六条内大臣

暮すてあふ待られさ衣夜のひるとみつすくかきりく

後円融院御時にすゝめさせ給ひし二十首哥に逢恋を

権中納言雅縁

しら衣夏のうち二つきわたるくにこそ中比なれ

嘉元百首哥にまつのぬれ所

万秋門院

こよひやふねのとけきあるまむすひのちきり成

権中納言雅縁よませ侍りし小野社三十首哥に逢

増恋　　侍従為敦

あひみしにまつもかひもなき身のとけくもなくむすひそめつ

延文百首哥に寄藻恋を

宝篋院贈左大臣

わかの浦の浪の下なるうきみるのひくにつれなきひとそこひしき

初逢恋を　　二品法親王覚誉

まれにあふよはの夢かとたとられてうつゝともなきそらのなかめを

貞和百首哥に

後三条前内大臣

涙川ゆくすゑかけてちきりしもあふせはいまそいのちなかれて

永和百首哥中に

深守法親王

あふ夜はのあけゆくそらのうらめしきわかれやなみたのなかれん

逢恋の心を

後押小路前内大臣

何か思ふ夜半にあかしもそれを待て今ものちもあさからん

寄関恋を　　前参議雅有

けふもまた實のあふさきあふ事はまたなきものとおもひしらるゝ

百首哥奉りしとき　おなしこゝろを　　左大将公名

立かへりまたやたのまんとしをへてあはてむなしき下紐のせき

題しらす　　平貞国

名乃みたけきゝてもしらぬ人そこの関の板の宿

嘉元百首哥に　　贈従三位為子

なかなかにあひみしまてはたのまれしたえはてぬへき命とそなれ

後宇多院にて人々題をさくりて哥よませられける

とし經年恨恋　　惟宗光吉朝臣

恨しとひかへしなかれのかたにこそ恋のかなしき淵なるらん

恋哥の中に　　後一条入道前関白左大臣女

またみてもまたぬ契の月かけになけきにさへそすゝしかりける

亀山殿乃七百首哥に

為冬朝臣

いかにせんあひみしことをかたみにてうつゝにかはる恨しそあらん

題しらす　　清寛上人

後世と思ひそめつるなからへはすこしはこひんと頼みけるかな

世の中にあはすはなにかおもひけんこれもあはれのなさけなるらん

とて侍りけるに　　刑部卿行輔

あふ事をいまはかきりとおもはすはいのちをさへもなにかをしまん

寄方恋といふ事を　前参議教長

相見ても身をしけれははなかなかに見きゝそなする

不逢恋といふ事をよませ給ける　後二条院御製

うらむまし人めを難にわりなくもおもてかはりし見えぬものゆゑ

恩二世恋といふ事を　鴨長明

我ならてこむ世のやうもさをわかい誰まつさに契りかねつゝ

洞院摂政家百首歌に　正三位知家

相ふたゝひ心みてみえ物を朝露のたまさかに見し俤そせん

うき身の程にうらみあらて云つゝまさる袖

に歌別恋といふ事をよませ給ける　後光厳院御製

いはゝやはいむもつきぬなかりけりとおもふ袂をあやのこさん

後九条前内大臣家の歌合に　藤原光俊朝臣

まつ程に物をつきたえてはかなき命をもつ

題しらす　源經氏

相し世はいさ知らすとも忘れてはあまりに思はさりけん

新玉津嶋社三十首歌に別恋　前大納言忠嗣

これそこの身にそひそんかなかんはおさなゆく神無月けり

恋哥の中に　　　法印慈忠

たつた河もみちの神なひのすきぬともきのふの月そ神無月

きのふこそ神無月とはなりにしかあきの月を見るかなあはれなりけり

貞和百首哥に　　　前大納言公蔭

いまそ見るやまのはかくれの清き光のありあけの月

題しらす　　　法印浄弁

わか身には知らぬとも知りぬなる物と人や見るらん

藤原高範

身をはしるは涙のひまそともかくりきて人にこひわひ

多々良持世朝臣

しのふれは今世にたのむことをかなしむ身とそなりぬる

津守国夏

恋しさのかきりはありとはきはむ涙の色

後門帰忠といふ事を

恋わひてそれとはしるにいふ事を

前大納言為定

かき曇るゆふべのともし火きえしものあけぬる夜はの枕には

恋哥乃中に　　　花園院冷泉

かくれ家のひまはなしとも見えぬまのしらぬあはれの物思ひ

別恋乃心を　　　法仁王

むつことの月のかけしるしなにやこそよその人の名残

前大納言長雅あひ見しはわすれもやらぬおもかけを
やかてかへりし朝のなこりをわかれ路の露
かへりて　　　従二位雅平女
有明のつれなさよりもきぬきぬのわかれはかりうき
鐘そうき　　　源義将朝臣
かへるさもまたかき暮る涙にてそむかれぬ人のおもかけ
小槻匡遠
さそふ夜の八重のかたみの袖の露ものさむきわかれの鐘
法印慶運
おくれしと涙のうへにたつそらもかへるさのあかつきの影
定顕法師

こゑたてゝなく鳥の音のたゝならぬわかれの恋しさにかへるさん
嘉元百首歌よみ侍りける時暁別恋
前中納言為相
わかれつゝの鐘そときゝあかつきのおなし名こりは別れ
千五百番歌合に
嘉陽門院越前
きのふまてとたのむもかたに恋しなはあかつきのわかれ
寛喜二年百首歌に寄枕恋
藤原隆祐朝臣
夢路にもとくはあらしとみるほとはまた枕の露の山ところ
弘安元年百首歌の中に恋の心を
前大納言為兼

梅かえたかはの月はかてみゆるまてさへはるゝ夜半のかゝみか

遇恋といふ事を

従二位雅家

たのまれてなにゝそへてうき物はかはれるさまの契なりけり

千五百番哥合に

前大納言忠良

おもひわびつゐにみる夢をあかつきの人のなさけはかなさぞ

題しらず

和氣茂成朝臣

恨てもひとりかへるのよるは又あひ見ても猶いはゝさらなむ

信空法師

みつしほのあふせはありと今宵さへいつか中にもなほひとり寝む

頓宗法師

ゐもとりて後はかりねの夢はかりさめてもさらにあはれ人かな

中臣祐臣

うらやましさのみ別はいとゝしくみちをたのみの夢ともなるらむ

延文二年百首哥に寄鏡恋を

寶篋院贈左大臣

かゝみ山年をへつゝもみるかけのあはてそなたのかけそなかきな

千五百番哥合に

醍醐入道太政大臣

さもこそやあはてはつらきわかれてもあかぬなこりの露そひぬらむ

恋哥の中に

澄覚法師母

たのめてもあひみぬなかは中々にかへりていよゝつらき明ぼの

前大納言為世家にて隔遠路恋といふ事を

性阿法師
をとめこか千とせの山のきくなれはたゝかさなれる数そやとする

題しらす　源保綱
なかめやるそらにみえしのつまならてひとりなくらんさをしかの山

寛元二年住吉社哥合に寄枕恋
宣秋門院丹後
枕とていく夜の夢をむすひきとしらぬ君かあふ坂のせに

従三位家卿
いかにせむせめて夢の宿たのめむなしくかへるうきなれ

参議雅経
わすれぬる契のほとをむなしとてやかてこん日まつ時の音

建保二年内裏哥合に羇中恋といふ事をよませ給うける
順徳院御製
いのちやはあつまの路のはてまてもそれとしらさぬ露も
わしらぬ身をと

新續古今和歌集巻第十四

戀歌四

弘長元年百首歌奉りける時後朝戀を

常盤井入道前太政大臣

ならひしも別れは誰かかねてしる秋の露ならひなれ
共

さゝ葉をも今朝もむすふの露の命こそまちて別の命なりけし

大江茂重

なかなかにあまりて又とたのめし言の葉やうきわかれの命なりけり

権大僧都賢雅

今朝も又たくひあらしと別れしかはらぬ人の心さへうき

祝部成胤

新玉津島社にたてまつりける歌の中に

藤原實勝朝臣

あはでふる年のおもひはいつのまにひとよの別にもまさるらん
かはらしとおもひ絶えぬる世の中にうき別れをもおもひしりけん
ちきる朝も常ならぬならひをしのひかねつゝ

蓮生法師

我とすれるなみたの袖におきそふる露もけさは別れなりけん

寄傀儡戀といふことを

後小松院御製

あけすなとすてゝきてしらす旅人の露の枕の名残の空

家にて百首歌よみける時後朝隠戀

藤原為忠朝臣

たちかへりあはれはかなきつけにきえもやらぬとゆへかとも

逢後帰恋といふ事を

藤原伊長朝臣

恋しさや [illegible]

源義綱源氏物語乃巻々を題にて人々によませ

侍りけるに花宴乃巻の心を

平宗宣朝臣

忍ぶとてさきそめしより白露の [illegible] 園の夜

貞和百首歌に

按察使資明

立かへり [illegible]

後小松院 [illegible]

られて侍りけるに　後朝恋

権中納言資清

御名 [illegible]

称名院入道内大臣よませ侍りける三十首歌に　初恋

権中納言宗泰

袖の上に [illegible]

貞治二年百首歌に寄雲恋

冷泉前太政大臣

逢事は [illegible] 雲の [illegible]

延文百首歌に

前大納言為世

かはりゆくきやまの色もいかにてかしらぬ中なかなかなるらん

民部卿資宣

うき世にはとゞめぬ中にいきてなにつゝむらむなみだなるらん

百首歌奉りし時　後三条入道前太政大臣

いかにせん老の若さもいたづらにみかさの松山なげきさへそふ

題しらず　よみ人しらず

柏木のもりてきえにしたのめやまても袖の色にそめけん

哀傷歌とてよめる　前大納言親雅

はかなくも涙の玉は藤衣つまとそへてかつみだれけん

前中納言定資

涙そへ色にかはらぬ緑松さへ袖の色とや思ひしるらん

哀傷を　称名院入道内大臣

人しれぬ袖にさへかくなげきにぞいかゞ世をうき涙なるらん

権中納言具行

いかにおもひいでし昔のことゝいへば人もむかしをなげきあるらん

題しらず　前大僧正禅守

袖よりもたゝせもあへぬ物ぞ涙かはくまもなき身ぞうき

慈母三年内裏にまいりて題をさぐりて五十首歌たてまつりけるに寄涙恋

崇賢門院

涙をはおさへて袖にまかせてもうき名たつらやしるらん

寄山恋といふ事を　左大臣

かりそめにやどかるたびの枕にもなほふかき夜の月を

百首哥奉りし時寄枕恋

藤原雅永朝臣

うき名のみたつせの浪にて枕かはさぬ中はやうらみられん

貞治百首哥の中より

前参議忠定

白雪の花のたまにもやとりけむさゝへてる入江の月のかけそこほれる

題しらず

紀之盛

峯の雲をたちひとさきそめし花をみしまゝ人のうらみん
長き夜の難波の人の文字をさへ花をさへたはふれて給ふ事よ
はらへやさんといひまつる人はなかりけり

俊頼朝臣

いとゞしく持ける袖もしほるとてひきかさねてそかけたにけむ
寄雑恋といふ事を　よみ侍し
いかにせん思ひとるれとなき人はわすれぬ雑事のあとを
題後朝恋を

法印慶運

今はまたあはむとおもふとても此かに難きに後そあふこともなき
弘安百首哥に

静仁法親王

とまらぬ田子の浦浪たちかへりて恋せてふ花のたえぬ気色
寄下草恋を

成恩寺関白前左大臣

白露はかくてすゝきの葉末にたゝ世をいさ河の浪の下草
家の百首哥合に寄遊女恋を

立帰りよせくる浪もあらしふく松のしつえはおとそたえせぬ　後京極摂政太政大臣

貞和百首歌に　前中納言為秀

あすか川かはる淵瀬は世々へても浪の関とも成にけるかな

題しらす　祝部成光

なかるゝ河水を清みてかはらこそ人のちとせのためしなりけれ

賀茂雅久

かきやれと今すみれゐて澄わたるやおさ川水の流なるらむ

文保百首歌に　前関白内大臣

ふるからぬ袖のしつくに苔むして山の井のみそあさくなりける

寄河恋といふ事を　待賢門院堀河

みさこゐる入江の水はあさけれとそこの心そふかくなかるゝ

寶治百首に寄河恋　藻壁門院但馬

しはしてもはるかにゆきてかへらなむかはのなかれのふかき心に

延文二年百首に　杉本

後鈍院内大臣

うれしきもうきもひとつにまかせつゝひとかたならぬ人の心を

百首歌に　関寄草恋

前大僧正義運

あふ事をいつかと思ふにあはれなるつらき人のあたの袖かな

恋三十首中に　よみ人しらす

霜むすふまつゆふへのころも草木かれはてゝ人もこさりけり

萬秋門院一条

そのはらやあれぬる宿のかれぬともたれかとふへきまつのむかし

寶城法師

今日ありてあすさへはかなき糸のたえまにたよりなきこゝろのさ

又恋を

我かためにかよひ路かたくなりぬともおもひのこすな

従三位為理

永和百首歌に絶恋

儀同三司 資

涙せく心のはてはつゝみかねしつのをたまき乃くりかへし

難波の浜

中納言祐臣

いつとなく思ひわひぬるあふことの庭乃秋風

切恋乃心を

法印慶運

夏にてもなほ中々に浮世の庭にのこるやこゝろのさん

わかきみの為そ袖にうつる涙かな

又寄年を

惟賢上人

たのむそよ涙の川のふかきはまたえん命のそてのしるし

恋の歌の中に

頓阿法師

さらにつれなき人にあふよしもなきにまかせてやくものなみ

百首歌奉りし時寄海恋

左大臣

わかなみはおもふ心の行末は海をへたてゝさそふ人もなき

有助卿と申事を　　神祇伯顕仲母

言ひたまひとておなき翁河なれいたる屋にすみ侍し

詠しけれは　　中納言家持

あま我年かたりむかしおもひ出てなんとこ志のふ杉いかゆかしを

きゝて三とせまりてなりゆきたる人なり

大江匡衡朝臣

何ひとつくいてやみと称するを成ときゝ日をとひてふつかへやはり

ものさ詩の句をもおもて百首を読む時三年不見書

この事を　　　　能因法師

なはさりけれは玉章わかさに納とみとせ雪井の庭にてひるく

弘安元年百首読て　　安嘉門院四条

おほつかなきみゆきとけてみしまえのまこもかくれの下かきを

寄瀧恋を　　二品法親王尊圓

おもひかねかへすなるよしをもつかさねん人の心はかくれなきなみのたきの音

延文百首歌に松を

入道一品親王尊道

さすかにもふりてもとすれしられんなれとも千よの松をなき

後鳥羽院の五十首歌よみ侍りけるに寄雲恋

後京極摂政前太政大臣

うきにけり人の心の雲たえまもてはてぬなきなの行

寄関恋を　　源満元朝臣

恋ゆく人の心の松をこえまた川の関をかゝはる

かきたえて別の中と成にけりみな玉章のかよひせし路

よみ人しらす

永和百首歌に

後八条入道前内大臣

いつはれる文こそかはりゆくすゑをおもへはつらき恋路成けり

深守親王

立かへり文をたにへきかひもなしそれきりたえし後のつてさへ

遇不逢恋のこゝろを

前大僧正果守

まちわひし其恋かは逢事にかへて命とたのみこそせめ

藤原雅親

なからへてけふは頼む命こそおもへは中々うらみさりけれ

中務卿宗良親王家百首歌に

惟宗忠宗

いかさまに恨よとてか逢みての後のちきりのつれなかるらん

貞和百首歌に

左兵衛督直義

わすれにきとかはりゆくすゑおもひをもこの世ひとつの恨みやは

恋歌の中に

前大納言實郷

うきはけふそのよの夢をかことにてうつゝかよひの絶とこそ知れ

千五百番歌合に

西園寺入道前太政大臣

かくてさき絶かちなりし夜の夢をそれかあらぬかと哀とそ思ふ

醍醐入道前太政大臣

露の身のその暁きよりいかにせんあふゆへこそむなしき床まて

貞治元年九月十三夜内裏十首歌会に遇不会恋

いはひてかさす千早ふる神のいかきの松のことのはそ

土御門入道前内大臣

後深草院弁内侍

まさ木のかつらつきせぬ松すにやちとせの葉のつもりそめける

恋歌とてよみ侍る　　読人しらす

かはりそと契しことはいくとせか松はへしへの情なりけれ

洞院摂政家百首歌に

正三位成實

冬みても別ぬ人のゆかりもそへつゝ色なき物とちりおきき

寄松恋を

前中納言為定

まつける庭の松かれてさすくこそみつからむなしいみきとも出むや

亀山殿七百首歌に寄松恋

夜を重ね頼めしへはも引替てあひみてしはと頼みかせてし

中納言為藤

百首歌奉し時

左近中将定親

見れはまつあひ見ぬ恋さへうらやましきは二もと比松

永和百首歌恨恋

権大納言為遠

みちのくにあひおひの松もおなし里そとしらすとしそふる

家に百首歌よませ侍る時遇不逢恋を

洞院摂政前左大臣

住の海の錦にけうはなの苦しくまつの消かりのちの世はつらき身

嘉元百首歌奉りける時松恋を

二品法親王覚助

ちはやふる神のみまへのさかきはのむかしをおもへやわすれさらん

津守国冬

あま雲とたなひきわたるさくらはなやしきさかりのかたの葉かな

光明峯寺入道前摂政家百首歌に若菜を

従二位家隆

なかれ川かけてもみえぬ雪のしたにおもひかけすや[illegible]とらめ

題しらす

藤原盛方朝臣

かきとめしなかれそとまるわかせはかはらんやおもひわすれさらん

寄遠恋

平宗宣朝臣

三島江の小菅かりふく[illegible]のあまのこゝろもなきにしもあらす

玉津島社歌合とて人々よみ侍けるに逢不会恋

権中納言雅縁

衣々のわかれしをこそおもひしにわすれはてゝそなきかけもなき

雅永朝臣

おもひやる心もわかぬかはらぬ人をまちかけてこそ

後京極摂政左大臣家にてよみ侍ける歌の中に

たのめてもまつとそ[illegible]ゆふくれのあきの[illegible]

おもへとも[illegible]こゝろこそ[illegible]

すゑかけてみるかひもなくおもひつけ侍る

平親清女妹

おもひやる夜半のねさめのみに[illegible]のわかれをもおもひしらするかな

題しらす　前大納言實冬
恋わひてなき名のみ年をへてたのみしもあふらしとそれ
延文百首哥に　土御門内大臣
ありしよの夢てぬ宵の枕にもおとろかしける鐘の声かな
家の百首哥の中に逢不會恋　洞院攝政前左大臣
たのみにはありし情を限りてとはゝ夢かとのちそかなしき
題しらす　前大僧正果守
恋しさは今さら身にそへてもあはれ一夜のや契ならは
慶運法師
あさにのみ見し一夜の枕にかはる涙の露とならなん

源持之朝臣
逢とみる夢やむかしの契なりけんさきにおもひて
絶恋のこゝろを　前中納言為秀
ときもなほわすられぬるとおもふにもなかなかいとゝふかき物を
寄月恋　源頼之朝臣
ありし夜の秋のわかれの月にさへ涙くもりてとはさりける
前右兵衛督教定家の哥合によみ侍りしを　藤原基綱
いつはりの秋のよなかにおもひ出てけしきにみゆる月の
永仁二年内裏にて百首哥めされけるに思切恋を　為道朝臣
いつまてと

歌よみあつめける此秋を去ていとや云り　新たの月をなかめん

讃天門院

御心文源そよみ侍るにみて松けや月にそみなん

千五百番歌合に　皇太后宮大夫俊成女

忍ふれとそれはけなくさし袖の秋の空にも有明の月

題しらす　寂蓮法師

月やくまなくさしむらんそなたの空の秋の風にも夕暮の空

よみ人しらす

まひ出たる源もくもる月のおほろかなれは

康安六年九月十三夜後光厳院にて三首歌か

をりまさるらんは寄月恋といふ事を

三品こそよみ侍るむへ此袖のへひと源をかくはぬ月影か

建保七年内裏歌合に暁更恋を

藤原光経

有明の月をみて此袖のかはらぬへてなくさむかと此契くれなれ

寄恋といふ事を　前中納言匡雄

人はよもあらしかへるとしてかへりまそてん帰らんかれ

文保百首歌に　中宮大夫公宗母

面影を偲ふはかりに年をへてなれぬ縁といふそれはなかのそらに

貞和百首歌中に　徽安門院小宰相

通年にいれまそてもちぬらめやなかふかそなかめしまさる月か

後九条前内大臣家の歌合に

按察使顕朝

かくはかりおしと思ひし年月のつきはにはくれにし人の身そうき

延文二年百首歌に歳暮

前大僧正賢俊

なからへん契しかなき玉の緒のそうかゝりて橋のかけてゆく歳

永和百首歌よ

後普光園院入道関白前左大臣

さりともとをしむ心のやすらひもたのまれぬ身の玉の緒の絶りそ

権中納言為重

冬かきて後そしたひし年なみをこえてとまらぬ身はいかゝせん

後小松院にて歳暮をよみて奉りし百首歌つかうまつり

ける時に歳暮を

勝定院贈太政大臣

ゆく月のいる契とおなしかにいつまてかくらの谷倉を

百首歌たてまつりし時歳暮

左衛門督實雅

おしひろき身の数さへ年のくれぬるなに山の井すまりとせめたに

弘安百首歌よ

前大納言雅言

年月をうちすきにし田のはたけよりおもかけにひとへに抱けむ

歳暮の中に

源経氏

積る年へゆく方とけなかりけり世中に抱れて見むとく

貞治二年百首歌に寄草歳暮

正三位知家

さのみやはいたきにはつへきさ年のみなみにおもひ残さく

新續古今和歌集巻第十五

戀哥五

題しらず　　紀貫之

あさ萩の下葉にいろ我そみゆるひとの心も秋はさぬなり

後福光園攝政家哥合に寄萩戀といふことを

頓阿法師

物そおもふ志らて風夜にも萩かえのおとはいくたひ袖そぬれけむ

百首哥奉りし時寄草戀

前攝政左大臣

まれにこそいはぬにいするしき萩をうらみて露やなをこほるらん

戀哥の中に

殷富門院大輔

あさ〳〵の花にをきゐてさのみやはこの恋わたるかなしき

寄女郎花恋といふ事を

権中納言通俊

なまめくもしのふ袖にもひみをしみてもいつとのみやかはらん

新玉津嶋社にて三十首奉り

後押小路前内大臣

あきをしらてさはたちかへる風そかはるらん中のちきり

弘安百首哥奉りける時

性助法親王

たのめつゝまたぬ夜もなかりけるかな人をおもはぬ

逐日増恋といふ事を

明日とはいふはかなさこそいはすらめあまや涙乃淵となりけむ

成恩寺関白前左大臣

寄思恋

源義持朝臣

年もへぬ涙の露の玉乃をのこゝろほそくにおもひまとへは

久恋を

中務卿宗尊親王家

としを経てわかひとり思ふかひなくも涙乃色をみせしとや

延文二年百首哥奉りける

等持院贈左大臣

ひとかたにひとの心はさりともとおもひへてさて中そかはる

文保百首歌に

前大納言為定

我のみやうらみもせむなけくらむやよいかにおもひけむ

題しらす　　三條院女蔵人左近

春はかりとまれ見えしにあひまたれぬさ物をまちそふるかな

嘉元百首哥に忍恋を　　贈従三位為子

松かせに世をはなれてもあらやとも待まてし人の松ひそふる

法印定為

きえかへりしんの橋の口をわすれ葉いつかわか世し花とのこるせん

恋哥の中に　　法印守遍

加茂とや心にきえし忘れむをしのひ袖のゆふけふそ

大江茂重

かくれそらさき我を忘せんとはかりに松ひとりのみ夜をそなかさ

貞和百首哥に　　按察使資明

しら雲にかゝる人の心ならさきやいまよの山の尾上にたかはん

題しらす　　法印定円

花そかれ人のそのうけせいは毎とをあらし口ゆかとなる

法師浄弁

忘れしと花し藤や見えつゝなりひといてはゝ風かなん

素暹法師

かくれさりしをは物へしやいは忘られた袖枕に二なれ契の言

千五百番哥合に　　惟明親王

なかひ流らあらひかれなかみせい姿とよらつ床乃人か

亀山殿七百首哥の中に寄枕恋

そらにゐはすゝしにたちかへりてきく人をなからん

前大納言為世

麻苑院入道前太政大臣家の百首歌よみ侍り
し心を

権大僧都堯尋

秋のとめるかりもひの花よすゑそれ風たいとふ秋の庭

永和百首歌よみ侍し

進子内親王

林の世のたゝとりぬるさめをかひるこそ雄れなきは

題しらす

よみ人しらず

人はとかくわすれてかへる中々にうつり秋をたのまん

後九条前内大臣家歌合に

按察使顕朝

かくれてたかゝろうかくもとるをひとりたちぬらん

寄弓恋といふことを

前大納言実明

そのかみなやうらん梓弓我ゆはひきゝてはさきを

恨恋を

平貞秀

あとなくみゆる人へあさからぬかゝみのすゑ

永享元年内裏歌合に

藤原兼房朝臣

つれなきにおもひ絶てやかへらわれをそなたにかへる

新玉津島社三十首歌に

従三位吉子

たのしともいはゝよそに成ぬへし中〳〵人をうらみかねつゝ

前中納言定宗

恨ても又こそたのめちきりおけはまくらかはらぬよその心は

右大僧正果守

うきせのみ渡る涙の川瀬かはさこそ衣もなからへてあひみむ

題しらす

三善頼秀

さりとも又恨をせしよ世の中に人のなさけはかね恨そ

嘉元百首哥に

源三位為信

見やとかりし涙もことはの露に恨をかけてこそぬれ

恨恋の心を

法印慶運

ことの葉をたのみしよはゝたえはてゝたつをうらみのかさなりける

後宇多院に十首哥たてまつりし時恨恋

前大納言為世

誰ゆへなかれし涙さはかはり行あたの契を思ひしられて

中納言為藤

おとせぬはうきにつけてもなき跡とかはりやあさましき恨ん

前大納言為定

まれにあふつらさ忘れや立かへり我をとへとも人の恨かねけむ

権僧正道我

なにゆへか恨をすらん我からにかはるうきもと思ひそめけむ

建長三年九月十三夜影供哥合に寄月恨恋と

いふ事を

前大納言為氏

おもかけはわすれてみやこへつきせぬ夜半の月かな

前左兵衛督教定

待えても人の契そうつりけはたゝおもしろき山のはの月

恋歌の中に

賀茂遠久

契のこあさかの沼のあやめ草つゆきも根のよなかれそなる玉

文保百首歌に

藤原忠房朝臣

あけ衣なれにし夜半の播磨かたあかしにあかす袖の浦なと

寶治百首歌たてまつりし時寄煙恋

正三位成實

はまのとし里のあまへと根くもりてあまの焦ける煙なるらん

弘安百首歌に

土御門入道前内大臣

身につれて根にきてわきれとも里のあまへ屋あかすなるらん

根恋を

津守国助

たのめにはゆきなさて海士はさのこなとうを浦はきもそなれ

後徳大寺左大臣家の十首歌講しける時に寄源氏

名恋といふ事を

皇太后宮大夫俊成

根てこ[illegible]のむかしみかれてしつきにわりなきとは

恋歌の中に

殷富門院大輔

あとひかれよしなきつれなさをまつ人もなきやかて[illegible]

家の百首歌よませ侍けるに恋歌

洞院摂政前左大臣

三熊野の浦のはまゆふ幾かさねみそきしてもいらへとる

堀河院御時艶書合に

　　四条宮甲斐

うきめかる人にはしらしとおもへともいとゝそのなかくて松かはら

もし

　　俊頼朝臣

かりそめのなさけはかけよあまのとまやかねて浪のしたにも

なしらぬ涙

　　山辺赤人

わかの浦に潮毎のかりもしかれ我はわすれし見しそ

　　坂上郎女

わかれてもおもひの春霞たなひくとひとり思ひかけさん

　　一条前太政大臣

とこへなる浪の床にもかはるなれはかわく袖のなみの浪

　　素暹法師

いはせはかりしとそや塩山下ふくかたに風ふきみらん

つまとものしらかきあはれはつらさ人のみとつらさ

　　小野小町

みるめかるあまのゆきかふみなと路になこそのせきもわれはすへぬを

延文二年百首哥奉りし時藻塩

　　進子内親王

あま人の玉藻かりかね袖のうへにみせたゆまぬ袖ぬれぬる

栲縄恋といふ事を

　　前大納言為家

たえかくれまつよの程のいかに縄いとてくるしきをもなをせん

寛治百首哥に寄鏡恋

後九条前内大臣

あさ夕のいそのかみにちかひてもかはらぬ鏡はあきもしらなむ

麻苑院入道前太政大臣家百首哥に

権大僧都堯尋

うらみつる人の心は鏡にてかはらぬものはなみだなりけり

常盤院に百首哥たてまつりける時

前参議教長

ながしとぞ神ひそかねぬる恋やなぞ御手水の心なりけん

弘安百首哥に

花山院前内大臣

いはひつゝかけしをなのこゝろさへかはらぬ神のいつはりを歎くらむ

大納言隆博

いかにせむ思ひあまりの恋しさにかたをもたのむかみのまゆよさぶ

秋恋を

平親清

人しれぬ身のむかしを思ひやるひとりなる神の姫とせ

松をまつを

よみ人しらず

さりともと思ひしいとぞ嘆かるゝ身のとしつもる秋の夜すがら

寄玉恋を

前関白右大臣

神よりも涙のそでに白玉のかずそへるゝ露の契りなき

恋哥の中に

九条右大臣

松風のおとやしき時ぞあふみぢのわれをおもひてなきけり

俊恵法師

秋風にさやかにてらすこほりかや高まの人もわれにきかさん

千五百番歌合に　前大僧正慈鎮

わか恋は沖ゆくかせに浦ちかみむすほゝれ[illegible]小舟かな

百首哥たてまつりし時寄濱恋を

前参議通敏

松かせのすゑ吹わたるさいはひ面影そのこはしかる

丹後守に侍りける時あひかたらひける女の[illegible]

とはてゆかしまくてはつゝはら

藤原兼房朝臣

涙とやくものはれまにかなしくも[illegible]

影こそなけれ

物おもふ草葉の末におく露のきえはてにとひ来よかし

文永二年九月十三夜亀山殿歌合に絶恋を

冷泉前太政大臣

あはれなといはさりし契の絶ぬるをかはらぬ物と思ひけん

人よかりてはと思はなかりけり

修理大夫

松かうの木葉くれにも見えすしもと見えすなりぬる

文保百首哥に

今出河前右大臣

中々に絶ぬる中の思ひ出に世をうしとてもいひかはしつゝ

前中納言雅孝

かつ見てもとゝめしともあたならて思ふとたにもしらせぬかな

永和百首哥奉りける時

前大納言為重

一すちにつまれさりにし流さへもはやくわかるゝ人のかなしさ

寄草恋を　法印慶源

かれはてゝふたゝひ春は忘草つまれしてもよし人のとふへし

文保百首哥に　弾正尹忠房親王

あふたのもちかひしを此岐の名弥をとへや忘るらん

ひさしくいひ絶ける人のもとに　権中納言定頼

わすれさよいひ絶ぬしと池水のつゝみあへぬ涙なりけり

貞和百首哥奉りけるとき　前大納言公泰

滝川おつる瀬をやみて絶ぬる人のいはゐをせくとよせけり

恋哥の中に　源頼之朝臣

年月のつらきなかれにやとなみたさる中になるらん

寄雲恋を　如敏法師

今はとてわかれし人も横雲のいつはりの空そかたみなりけり

建武元年八月十五夜内裏にて人々

よみ侍りけるに寄月絶恋を　堀川前関白左大臣

ありけむ夜のうさたはるゝ月影もいつまて絶ぬかたみなるらん

藤原行房朝臣

きみかよに世々の契の成てこそかゝみの月そ神さひにけれ

寛永十六年九月十三夜内裏にて題をさくられ
百首の哥つかうまつりけるに同心を

後三条入道前太政大臣

契しをわすれぬ末も月やむかし神の瀬とふらん

権大納言為遠

寄絶恋をよめる

我身そといひそめしや情よりこそ契の末はたえはてぬ

藤原元康

松寄恋を

ちきりすまそせとし人のあはれを思川あさき契てうけたんとい
月のあさき契の人のとひくる言のはよ

太宰帥敦道親王

わすれなむとひこし河やこの月影をみるかなしき人をは

洞院摂政家百首哥に

常盤井入道前太政大臣

絶てしも人の心そ瀬河なかれ水上乃えくしせかれけるかな

絶恋を

兼好法師

うきなからひとつれなさにかなしきさそのかはのふかしくしらなかりけり

松下恋を

源頼元朝臣

ちきりおきし根にそすそあさかぬ契てそいつの人の琴

平根絶恋といふ事を

よみ人しらす

かなひしにふかしの葛葉かはらも秋風吹

弘安百首哥に　大納言隆博

待わひてうらみし人のこひしきまてに成りにけれ

百首哥奉りし時寄鞭恋　前右衛門督為盛

駒なめてうちはとそやまちわひんうらみもしらぬ中とならん

文永二年九月十三夜亀山殿哥合に　猫光園入道前太政大臣

こぬまてそさすまされ恋やまちまたのやとのまつちを

兵部卿隆親

うき名をそゝ我になかせやすらぬ顔をかこち恋の苦

前大納言為氏

さてとてもいとなかきれ恋を明かすとも何か絶せん　按察使資平

いつまてか待わひぬらんなかめをもむすひかけりしなかのうき橋

建保四年閏六月内裏哥合に　正三位知家

こひは昔ありぬ人なれは杉ひとり聞く萩のうは風

寄杜恋を　藤原秀茂

かけにける人のあたなる森にこそはなけきさへもの森

初逢恋といふことを　權中納言俊忠

玉ゆらにあふもたえせぬ藻をかきにあひしはさそ恋の恨なりけれ

弘長百首哥に　逢不遇恋

前大納言為家

うち川霧の思ひのけ草かりそめに又やむかしにかへるさとかな

建仁元年三月新宮撰歌合に同心を

源具親朝臣

中〳〵にはしたのまろき世のなかにかゝるへしとも契やらすも

建永元年七月歌合に深山恋

後鳥羽院御製

渡りせぬふかき涙の色まさりとはれぬ山の松そかなしさ

後京極摂政前太政大臣家歌合に寄橋恋

前中納言定家

人こゝろあやふさそへの橋よたゝかりそめ木奈かゝれ林の通路

百首歌奉りし時

関白前太政大臣

棧のとたえにかゝれ橋をかりそめにわたす中はなかなかかけけり

貞和二年百首歌奉りけるに

民部卿為明

とたえつゝ渡るとみしたにみちはなのくちぬる橋の中絶ぬる

寄絲恋

正三位義重

絲よりも人の髪こそかとはるとそあふむたのとき逢

題しらす

万秋門院一条

あはれ我のきはなるみそかけてかなはぬきえさしに思ひそなき川もん

新續古今和歌集巻第十六

哀傷哥

世いとはかなかりける比

朱雀院御製

春近の風とそはやく成にける思ひかけき物はかなけれ

白河院乃御子春宮にてかくれさせ給ひて後忌小わたり侍
けれ其日の雨ちりけるに大僧正行尊のもと
よりむかしはや春の宮への花のちりて花もちりさし
まちつる物とはとやしりけん返事小

常陸乳母

花ちりし道をしたふにいかなる方をさしてそ世も春となからむ

花山院うせさせ給ひての春わすれ給ひさきとおもはれけれは

道命法師

わかれとや山の桜もおもふらん春をもしらて咲る春風

左京大夫源頼之朝臣の遠忌に縁通墓所
にまかりけるに雪のふりけるを見て

源満元朝臣

わけきつる花をかたみと見し跡の山の雪に跡もなかりけれ

前左兵衛督教定四月八日に身まかりにけるを
おもひ出侍りて

前参議雅有

月影のうき世にそむくかへるさを猶かなしみて雲の嵐

等持院贈左大臣かくれ給ひて又月昔百日のほとに

従三位有範身まかりにける比

藤原高範

時しもあれ袖にうきにうけてむ雨を涙と思ひけるかな
なけく年のつかれる雨すこしありけり

民部卿顕頼

又月毎の宮を限にあるまえかとんきゆやとれて雨ゆきまくれはき

中園入道前太政大臣かくれ侍りて後比叡法師益守
僧正もとにつかはしける又の年の月毎

前大僧正果守

かりそめのわかれの涙の藤衣きたをもみよ身のはての月の宮

権中納言清長身まかりて後よみ侍りける　納言

らんてとは来つりけり年はに降とりて

後小松院御製

秋かせに扇の風のかはらねとさへしはしの草はの露の
藤原守継朝臣身まかりて又の年の七月七日に
いつ月てあまたの御事をそふたりけるに
下の掛かたはしけるに

条後家縁女

秋ともいはぬ思ひはかはらぬにかなしさのみそ涙世や

藤原隆祐朝臣

なき人の世をこそ秋の身のかなしき
惜身世の涙は今こそ

あとはかくすゝしきむかしなりけり

建礼門院右京大夫

雲のうへにいまはとかくみ月のひかりさてもあはれとうけき

九条内大臣にまかりて此前大僧正慈鎮のもとに
つかはしける

後京極摂政前太政大臣

とふへつるなかけをあつめて菊みにいきし秋の月はくもりなきを

返し

前大僧正慈鎮

いにしへの秋のさやけき宿にもとし月をへし君こそしるや

前大納言にて侍年かゆるにて後らと侍りける

前僧正實伴

春ゆかしきをあつめ月みえは新たなる新しく春の給ふ

後光嚴院御時せられけるに十月おなしの題
人よりもとをきめされける事をおもひそれのあつま
みてなし侍けるに新たなる

権大納言公時

ありしよりふりにしそめ新たなるさためなき世の数せしに
母の御かたりて三とせの秋かゝるに宰相曲侍りにけり

権中納言雅孝

花のちりしあとをおもひあへすこのはかいかにしとよ春

後宇多院宰相典侍

このはは散りしみちをとめやらふこのことよれ神の時雨

源保経

散らし候

出家者を葬りし人を見て草の原にて見し野辺の煙なりけり

無常のこゝろを　　六条院宣旨

世中は末葉にかゝる露の身のいかにしてかは志らぬそよかし

大江茂重

草の原吹こす風のすゑはみな露なきものそ世のならひなれ

西行法師

ありやなしやはかなき命は露きえて野辺〳〵や誰もかはかなれん

僧正宋縁

多く野辺の煙の末を哀なりいつれの時にかはなからまし

二品法親王守覚

なき跡をしのふやいかにしても〳〵さかりの花のあとを清め

聖西上人の方へつかはしける　　従三位行能

世のことはいつれも仮の住かにて結ひし庵のありさまもなし

寂蓮なと無常といふ事を　　津守国冬

あすか川淵もせとなるいにしへもきゝし世中の夢のなきにこそ

題しらす　　式部卿邦省親王

世中をなされさ夢と思ひけりうつゝにて見るはなからん

前大僧正良真

家なけれ身のはかなさのうきにかはらむ

入道親王尊快

中々にそれとも見えぬ夕暮のとりへを見れはあはれさはらぬ

述懐
前大僧正公豪
うしと見てそむける世の蓬のさあやらて猶すてかたき
又蓬生にゐりて乃法のしるしとそ世の人の思ひ給
心まれは
卜部兼直
ねかひ世にありやなきやの心さへ小蓬と思ふ人のうきさ
貞和百首奉りける時
正三位隆教
なにゆへになれぬ心そ小蓬の世にはのこりてかなしかりき
袖とへは袖そ露けき春もむかしの涙を庭の草のかけに
前大納言公兼
八十にあまりける母をそへて
たらちねのむかしを思ふにたかくさきぬいつはりの花の上に
藤原秀茂
ゆくすゑのあひ見しものをとこしへにかなしみて侍りける
左西蓮
別てはなくへてことなりにしにわれいつまてきみそわすれむ
題しらす
女御徽子女王
月日こそあはれすきぬれいにしへの面影のみそかはらさりける
後九条前内大臣家哥合に
前僧正實性
はかなくと見しのへは忘れつゝもわかれはなとや人のなをさけ
藤原行長朝臣

言はでいく夜の袖にやどりてなげく我身をいく世へん
其中に法しらせをたのみ哀ならん

和泉式部

うきものはなくなる世中にいかふを恋しいはんとやする
あさからぬひとのこゝろの見えずなりにけり
松の風わたりもそれをさして一もとの煙とやならん
其寺の山を

大江廣秀

煙だに立のぼりてこそ限ある人の命なれそれはかなき
参議になりて後文乃墓所に詣りてよみ給ふ

前参議雅有

うつりゆく光にあまりめる涙ぞ昔の下をも露とをしめ

ひえの山霊山とよぶ所の墳墓の地とさだめられ
けふは雨をもよほしけるか

中原師尚朝臣

ちゝやさき林の中に松をかつら(?)ひさしき昔の上に
麻苑院入道前太政大臣十三回乃遠忌にかの墓
所の寺にまいりて給ふも松風をきいて年をへ
むつひ給ふ事なくおもひ出給く

権中納言雅縁

松風のけの楷木とさへいかで十とせあまりいかなる
養徳院贈左大臣は右馬頭にうつりて後左大臣従一位を
うけられてのち延文四年寿持院贈左大臣

御宿直をうけ給はりし宝篋院贈左大臣家へ
こみちなけれは諸侍の中なりしかは侍く

前大僧正義運

住山おとは昔にかはらぬ色ありてはいまそしられき

源親卿身ありて後の遠忌に義経すゝめし源
氏物語の巻々を題にてよみ侍りし時
桐壺乃巻のこゝろを

前参議経有

限とて出し都をへてもなき命ハ猶そしられき
おもかけと見し横笛を

寂恵法師

笛乃音をなからき世まてにつたへてもむかしも成しかやうさん
あつまなりとおもひて都をのかゝる女房清原
音にきゝかはや宇津の山ふもとまて給ひし

藤原頼葉

ところにもたちさらて宇津の山うつゝも夢も
みる様なりし

新續古今和歌集巻第十七

雑哥上

寶治二年百首哥たてまつりける時歳内立春といふ事を

前大納言為家

朝ほらけまたふる年なからにかすみてたつや春の山のは

題しらす

藤原清輔朝臣

流らへてもとの身なからすきこし御溝の水に春はかはらて

正三位成国

浦みより霞わたれは志賀の浦や神代の松に春はきにけり

麻葩院入道前太政大臣家にて早春霞を

前参議永範

春はやとゆふつけをみるより山のはとほくかすむなりけり

百首哥の中に

順徳院御製

しき嶋やいまのとくにかきとむる百をとめ（？）てかへさむ春の初風

題しらす

前大僧正禅守

うち出る浪のしらゆふもたちかへり岩風さむしこゆるきの春式

海霞といふ事をよませ給ける

後小松院御製

きの海や松のみとりもみゆる哉霞の底に舟そ入ぬる

住吉社にたてまつりける哥の中に

宮辺入道前右大臣

住吉の松の梢も霞つゝひとつにみえて霞わたるなり

寶篋院贈左大臣家にて三首歌読侍りしに
海邊霞を　　従三位雅家
春きてハ海士のかる藻も霞けり浦の苫やハさひしからん
新玉津嶋社歌合に浦霞
後醍醐院女蔵人万代
立のほる煙をかすみにまかへてや浦の海士の塩やく
春歌の中に　　祝部成茂
冬枯の跡はそれとも見えす田子の浦の霞に煙たつらん
源持資
[illegible]
嘉元百首歌奉りし時霞を
前中納言為相
春はまた烟をもあけて山里のかすみにまかふ柴の戸の中
康安二年春比禁裏にて人々に歌よませられし時
鶯といふ事を　　二品法親王覚誉
くれ竹のふしみの里の春ハ我かやともうくひすのなく
延文二年百首歌に若菜をよめる
前大納言實若
春日野やまたかすかなるあとをとめ我を年をつむ
文保百首歌奉りし
中宮大夫宗女
あさみとり霞の衣やゝ袖のしたにほふ煙るらん
山梅の色ならハ梅花の香をハ

後亀山院御製

山路ゆく人をとゞめて咲ぬるはとまり〳〵の宿の梅かえ

題しらす　従二位長方

木のもとに残る香そしる梅花さむる枕の袖にうつり匂ひを

世々の色をそへたる梅薫袖といはん年を

尋経法師

笠もまた忘れはすれとかたはらにたれか折ける梅の下風

春雨を　鷹司院帥

そほちける袖ぬれせしや春雨のふるは涙と人のとはん

春哥の中に　紀行長

河岸の糸の乱かひき浪の玉ぬく青柳の糸

嘉元百首哥に春月を　贈従三位為子

難波潟やとらぬあまも光をはかすめるものを春の夜の月

住吉社に奉りし哥の中に松を　源経信

かつみるも春やむかしの秋の月ひかりはかすむ影は

帰雁を　中務卿宗尊親王

あはれにはなかぬ日もなき世の中をいかにかへるとかりのなくらん

貞和百首哥に　前大納言實教

ちる花をいかにかそへてかへるらむあはれはるかに雁の鳴也

題しらす　法印慶運

きのふかたいゆくらと志てみよしのゝ花の移れる春風そ吹

藤原宗秀

めくりあはん松とや宿は咲つらん都の月はかはらぬ春の糸

志ら雲は嶺の中に桜とて人をさそへ行て

従三位氏久

うつろへる松のひまよりみえそめて春やさかりの花のゆく末

百首歌の中に待花

直明王

咲まの花の木末はよそにみる雲の松と友とやつれ眺めなん

落花といふことを

僧正宗縁

世の中をつらしと山の春ふりて吉野の桜花もやさ歴

新玉津島社歌合に花を

権律師則祐

いにしへに志らぬ山路の花の香にふる雪ならて跡や待さん

同社三十首歌に

妙藤法師

余所にこそ浪あるとも山桜あはれたれにか花は志られし

花歌の中に

藤原為量朝臣

うらはれはひかりそよ山桜折てそ思ふらむ色

さきゝぬるみかりの小倉山あけほのゝ花のなかめゆく

清瀧河のみなかみははるをしらすとかつてそ散

散の花後にたるにみしにあとたえつかる世事よ

小侍従

あひみんとちきりし梢を君はさいはひのもや我を待らむ
かゝる詩乃句のこしつゝさそはゝたゝ花發風多
といふ事を　能阿法師
世中はかくそありける花さかり山風吹て春雨そふる
尚歯會にたらひける所にてよめる
刑部卿頼輔
花みると命ありける春柳乃糸よりかけて花もちるらむ
花の歌の中に　前大納言實顯
長閑やも千代ふるつゝて春ことにかはらぬ井の花乃匂ひけ
式部大輔秀長
吉野山かさねの花さかりあらしも風もきこえぬ春なれ
落花を
僧正實伊　意
うらむへき風ふかすしてちるものゝさそはぬ方をたれかうらむる
津守国博
ちるをみて日数ふりにし梢には風よりさきにちるやそらなるらん
経円法師
もれちるをみて
さそふへき人もなくてさくらのみつゝ桜もいかにとふらはちるらん
法眼守遍
吉野の龍田乃山は春風のさそふも花の名にこそありけれ
題しらす
上西門院兵衛
久安百首歌の中に
さくら花たゝにふかせて其の梢をもや風乃みえん
後京極摂政前太政大臣家乃百首歌に山家を

みちぬにしひかりをゆるしてまたもとおほせこと
あのちれい　　後深草院少将内侍
いろよなる花の色々とかさしとは誰かみるらん
嘉元元年内裏百首歌に嘗帰花といふ事を
　　藤原信實朝臣
吉野川はやせの花をかさしつゝ袖とそおもふねもころに岸の花
寄木述懐を　　津守国助
春はあふさ枝をみそく鞭なる花さへぬるはかりおもふ嘆
くらふ百首歌めされける次に茎葉をよませ給ふ
同し　　崇徳院御製
あれはてしさひしき宿の庭かせはひとりすむにも花の色かな

歎老を　　源兼氏朝臣
ふりはてゝやよひの春はいりあひの鐘に山かきは花
散る涙　　正三位通藤女
花ちりてさひしき庭にたちいりて我まてかなしき春の藤浪
文保百首歌に　　前中納言實任
袖もいとふかみえきぬはるの藤花花のなをまそくなになる
藤をよめる　　前関白左大臣
春日山木かさ紀松をみてたか御代の春をかけてそ藤浪
康永六年三月興福寺の金堂供養せられし日
咲藤のよゆくも松のひつけゆる
　　前大僧正道意

春日山花もさかりか見わたせは立そふ雲は山の霞

暮春の心を　　雅成親王

いかはかり時しる人のおしむらん我たにけふの暮の春をは

法印慶運

年くにおくるとならはかへらぬもなをあかぬ名残

延文二年百首哥に文亥を

前大僧正賢俊

あすよりや神乃花染うつりなむかはる衣の夏たちぬらむ

永和百首哥に　卯花

冷泉入道前左大臣

時ならぬかきねの花は卯花そ春のなこりの雪かとそ見る

郭公哥の中に　　洞院公賢

かたらはむさつきをまたて郭公声のたかなるふもとの里に

文保百首哥に　　後花山院内大臣

聞かたにたちもとまらてさそはれむ月にはそれとなく郭公

待人もまたぬもおなし郭公ゆふへの[illegible]

郭公を　　前大納言為定

聞しをもまた[illegible]卯月の[illegible]

前中納言宗宣

題しらす　　洞院成之

なのつてもまたぬ空の[illegible]

よみ人しらす

さなへとる里のをとめの時ならぬひきたつ川へきのふまて

鳴声へいさけともやかくこそ(?)山ほとゝきすはなかなん

夏哥乃中に　源三位頼政

おのれなくねは宮の郭公雲のうへたに小注をこふらん

千五百番哥合に哥　法橋顕昭

なほさりの時にも聞かぬほとゝきすのひとこゑを

年経ても五月廿日内のつきの

よりをとつらさを恨むなとひとつるはい

周防内侍

そのかみは引もなかひきいねのまゝおやめかれ

よるの浪　賀茂益久

神まつるみむろの里のひくしめはくれなゐのは(?)

夏草を　権中納言雅縁

葥（やれ）荻の露の末葉のひかけはしのふに注まなん

永和五年百首哥に五月雨雲を　入道前左大臣

なからさすかにみえておなしく雲に成ゆく五月雨の空

鵜川をよめる　大納言基冬

さしのほる鵜舟のかゝりかけてとまるらしみやこの夏

螢火を　伴周清

蘆しけるかやくさのまゝのみのかけはいつれやたな螢らん

應永十一年内裏にて人々題をさくりて三十首哥つ

かくまつりし時浦雲　前大納言為平

よさむき風にたゝよふ浦水に新しきまてやかのみ

弘安百首歌に　法印憲實

うへまても言にあらはれ夜半秋をわけてなきぬ橋とに

鶉なく也　ひとへしく浪

ふるさとて浦とをみぬ蛍のかくれぬる松のひかりあらん

えのとれにもかりをさそりて井つゝにまつり時浦夏

月を　権中納言雅世

ねさめしてあかれぬ夜のかるさよみるめすゝしさ短夜月

探月を　源資雅朝臣

袖せぬ秋かとみれ浦のあすか衣やとれぬ月の

亀山殿七百首歌に庭瞿麦を

侍従為親

秋の色にそめいてゝけりひさすやかさ子の庭にまたなてしこ

百首歌めされけるついてに蓮をよませ給ける

崇光院御製

雨はれて玉ちる露を蓮葉の花のひかりと松もみるらむ

荷葉藏水といふ事を

前大納言親雅

水底はすゝしくみえて蓮葉の風にふきかへしひまなき池の

うへにうかへる松の影にかくれぬ水の涼しさ

出羽弁

江のきし河よりかよふ風もとの夏にはいかてそみゆらん

善覚法師

樹陰納涼を

日さかりはよそになる木の葉かくれて枝すし松の下陰

題しらす

法印仁杲

なく蝉のこゑすゝしきは篠にいてゝもる月の影かな

前関白左大臣

蝉を

夕くれは山の木かけの風にすゝしくのこる蝉のもろこゑ

柏秀房

我のみと音をやなくらん空蝉のむなしき世とは猶そしれ

正治二年百首哥に　二品法親王守覚

よしの川山風吹すさむ夕暮にすゝしくのこる日くらしの声

秋立日侍ては禁裏の六月祓を思ひて

従三位脩久

みなつきや昨日は秋とさしも夏祓するひと秋をまちけん

夏祓をよめる

祝部成仲

吉田川浪や枯枝とゝもにすむみそきする瀬に吹風の涼しき

立秋風といふ事を　読人しらす

あきたつといふはかりにや荻の葉風そよくにしるき夕くれ

題しらす

賀茂重久

秋きぬと梢にしらるかな梧の枯葉の下風をといかけり

千五百番哥合に

土御門内大臣

秋きぬといふはかりの三日月の光をそかけて風も涼しき

建長三年九月十三夜影供哥合小山家秋風

前右兵衛督教定

折らぬ木葉乃色はさもあらはあれと秋やとふらん風そ身にしむ

建保二年八月内裏哥合に秋述懐といふ事を

大納言通具

紅葉とふかき風ならし山の風もなし林をむらし紅葉の芳

林葉の中に

西行法師

おりしもあれあはれの事はゆふ萩乃葉みたる林の秋風

源和氏

萩の葉にをとよりさきそむら雄風のふきぬ秋さへ露そこほるる

百首哥奉りし時萩を

前参議道教

風ふけは露そ散る萩乃下葉もとあらの小萩いかにさかりん

野分の次

権中納言重有

老らくの秋の紅葉まさる秋にまさりて露そふ萩乃風ふく

七夕の心を

民部卿資宣

七夕をあはれとやみる年をへてかすてふいとのかはらぬ契りを

津守国量

七夕の契りしほとやてにみちてやまさらはいかにさかるらん

後九条前内大臣家百首哥合に

後深草院中納言

秋の夜をおとろかしぬる物なとは七夕はいやたかひにしたふらん

野径萩　　源基之

あさ露の花すり衣うらさひしそめてそ野への秋露

題しらず　　柏遠村

下葉まて色つく野への秋萩は花のおもかけ露やとゝめん

女郎花をよめる　　菅原道経

女郎花の下ひもとけて後たか心の野へにほふらん

後小松院にて題をさくりて奉つりける歌

稲妻を　　権中納言経成

影やとはおもはぬ物をかねてまたたのまれぬるひかり稲妻

秋の夜は鐘の声きく枕にもなくさめかねつ

さへかへりうつりまされはおもひつけゝる

題しらず

神か露はいつとはなしに国の秋の露はいろそひてさきにほふ床

秋夜長〻無睡天不明といふ事を　　太宰大弐高遠

秋の夜のなかきおもひのなかきに袖のあつかり行くへしらぬに

晩秋の秋をまちまちて竹の林のこゝろ　　後亀山院御製

なをひややかに人のふかきさ衣おもはれねさらに秋の露をかけてと

家百首中に庭月を

麻苑院入道前太政大臣

冬くにはさの秋の花の咲きまちかねつゝたかにかさ庭の月影

後小松院かくれさせ給ひて五十首歌つかうまつり
けるに月前露といふ事を
勝定院贈太政大臣
風さゆる小萩の露を吹ちりて月にそふ成宮城野の露
深山月を
菅原雅明
色かはる月とやみらむ深山の松にかけさへ木はなを
石清水社千首哥の中に待月といふ事を
藤原右經
嵐ふく荻の松原のくと木のしたかけに月もいさよふ
題しらす
荒木田經郷
天の川まつ月ふかさひしき瀬乃音をひきかへてなる秋の稀
祐燈法師
さよのかう光もきよし淡路のみえの松の木の葉の月
寶塞法師
松風の松ふけととも浦さひしく神もふるやすみよしの月
鹿苑院入道前太政大臣家百首歌に浦月
権大僧都尭尋
舟よするまつの浦浪たちかへり月を松にやたつ橋
月照古橋といふ事を
左大臣
よるをこめていさこそわたれ橋のあやうさを忘れてや月にはすゝむこゝろ
後深草院横川の無量寿院の井にすまひて

法皇の御事なとおほせ事ありけるついてに奉りける

真縁上人

おもひ出る雲井は月の面影も横川の水にすまぬ夜そなき

月は此方にありと

後小松院御製

雲井にてなれにし月は思ひやる方もなくてそ涙くもる時

正治二年百首歌よ

小侍従

なかなかに露をかのこしし月をみるあはれこの世の世

弘長百首歌奉りける時

後九条前内大臣

思ひ出る人もすみうき世の中にかゝりて秋の月をみるかな

月の入をみて

源有房

山の端にかくろふ月をとゝめおきてわかれかたきにかなしき

題しらす

源光行

あはれともおもひ出るをいかにせむしのはん月のひかりなりけり

藤原光俊朝臣

秋さひしき世をそむきにしあはれにもなりにけるかな山かけの月

貞永元年閏九月十三夜洞院摂政家歌合

ふたゝひとやはかくこそ

なか月の秋のこゝろをかさねてそ又ことにみる夜はの月かな

題しらす

卜部兼直

月の秋たゝ七月と契りしをとしもかさなる秋そなかりける

應永十六年九月十三夜内裏にて人々題をさくりて
百首歌よませられし時寄月雑事を
後三条入道前太政大臣
むかしみし宿のけはひなかはらて世の月を忘れかねつゝ
月見し宿の中は
多々良盛見
なからへむなほ影を月に契りては家路にうけゆく秋そ久しき
月見とてよしなきひとりねをも後小松院御製
影なくもありえぬ物をなかめてのち月をかけてや
立出る窓さし分る光に雲はまかせても松世
らむとはしるけれとも
権中納言雅縁
気よしあるしのたてに雲晴て又そのをてゝ月をかたむけとい

題しらす
前大納言為定
いにしへや住かをもとめし山里にすみなれてこそ月の影見れ
等持院贈左大臣南山にて行幸なりし時九月十三夜
よみけるに秋の月をもよひ出て後八条入道前
大臣のもとに申遣はしける
なかき夜や月を見つゝも歎きてかたを待つゝ涙の露の秋
儀同三司 實
返し
長月やこゝろも世をは秋の月みてそいつまてよそにみしとそ思ふ
後八条入道前内大臣
月前麻を
津守國助
山かけにいつすむ人の庭の秋をはひとりや月のよそに見るらん

宗仲法師

をとこ山ふもとの里の庵まて月のひかりはさしていらなん

朝麻といふ事を　源待春

鳴あかす夜の後の時雨のやみをこそあさきりさそふ麻の葉

建保名所百首歌に　前参議忠定

夕暮は旅の空なる麻の葉に小山もとよくさすらへ

至徳元年七月七日但馬守七首歌中に於撰

夏山麻を　後円融院御製

時雨もいかに山のそなたに麻のはもや世のかたに秋を葉

儀同三司資家の毛をさしつゝ詠みける時田家

麻　権大納言資廣

秋の田のかりそめならぬもとふなをいつまの秋のつゆの数

擣衣を　紀俊豊朝臣

旅ねしてふしやまろねのひとりねの衣うつらん

萩原雅親

七月の世の月に秋更てさしをさしあさはたゝ

藤原雅孫

さむしろの露をかさねてさして秋や衣うつ人

住吉社にての哥の中に　正三位兼雅

橋姫の衣たちかへて袖をとふらん宇治川

天橋立をみて　藤原為忠朝臣

たちのほるかくれなけれは松かえにうす雲かゝるあまのはしたて

嘉元百首歌の中に霧　前大納言経継

夕日さす秋のみなとの松原は霧の小島によそに見えけり

正治百首歌に　前大納言忠良

秋の野を霧の雲まよりさし出る月白妙のなみの上にけさ

霧をよめる　源季廣

萬葉をとふよしも風はいまそしる田子の浦路はなほ霧のゝら

燕子樓中霜月夜秋来只為一人長といふ事を

後京極摂政前太政大臣

ひとりぬる月と霜とに松さむみやとそ我をもうけやまかせ

松風

ゆふ暮の雲にかゝれる松となきては秋の松の根を吹

千五百番歌合に　源具親朝臣

露さむる秋の末葉は浅茅原虫の音よりそ枯はしめける

正治百首歌の中に　従二位家隆

あらし吹すそのゝ萩のなく声の山のをりたつ浪よりそ吹

建仁元年八月十五夜撰歌合に海辺秋月

嘉陽門院越前

紀の海や松にかゝれる雲はらふ風吹上の月影あかき浦の

円融院御時指月世事ふかくけり

よみ人しらす
岩の井とそやいはゝかんあめの下なる菊をしらさむ
内侍
円融院御製
むらさきにうつろひにけり菊の色はいかにとそおもふ
菅家万葉集哥
よみ人しらす
あき風のふきのまにまに秋の色はいつとはしらぬかけさりけり
山紅葉を
従三位雅宗
時雨れつる雲のたえまにみえてけり小倉山もみちはもみちに
秋哥の中に
右大臣
深山の木のまにかくれなく紅葉をのこす峰のあらし
題しらす
源教親
暮てゆく林のかれはみえもせて野原の草をしるしにかそふらん
念阿法師
草の原露もかれゆく夕の色つゝきてはおもかけもなし
九月盡を
土御門院御製
ゆふくれのおくれぬさきに秋の色の峰のそらにそしらせなりけり
初冬のこゝろを
従三位行能
霜かれの草むらに時雨はふるとたえまなく冬をしらせて
流るゝ雨のとゝまる事を
勝命法師
一むらにふるとみえしはよしのの山の岩根にそ見えし

正治百首歌に　　　源師光

きえはてゝ時雨やまぬるかんなりの田の庵り雲そらゝわ

落葉を　　　前大僧正良瑜

もみち葉の色かつちれる山風にかつはゝおしむ木のもとの秋

頓阿法師

のきちかき花のまかきにうつろひてしはしかゝるもおなしはかなり

残菊をよめる　　　津守国基

うつろはぬ菊をとゝめてさはは花のみやこや色にもあらまし

延慶元年百首歌めされける次に

亀山院御製

いたつらに霜をもまつや小菊の花の日をふる一秋のさかり

題しらす　　　六条院宣旨

暁の松の嵐にしほれて霜にふりにし鐘の音かな

正治二年十月歌合に枯野朝　　　刑部卿宗長

野への色は移て霜もむすほれてみえしは萩の下風

寒草を　　　法印慶運

まかきの草はにはみる霜の葉の霜のあさきかきり

頓阿法師

冬の野の露は霜にみて日そ暮そなかくあける篠の

秋の月の比は今は雨ふりて

後京極摂政前太政大臣

秋すきて露をひろひし庭の木葉も庭にも月ぞ（新イ）

寒蘆を　　津守国量

霜さむき芦の枯葉にをれふしていほりかけの浪やよるらん

題しらす　　読人しらす

すみかはる河なみや宮と成ぬらんやそせの水も道し尽して

千五百番歌合に　　摂政太政大臣

かさゝきの衣手さむし泉川わたりなく秋風さむみさえ

嘉元百首歌に浦千鳥　　前大納言忠信

松も見すむれゐる浪かとなりみつゝ宇治の浦のなく千鳥かな

題しらす　　源経有朝臣

今もまた和哥の浦路に千鳥なくたえぬ跡をや世にのこさなむ

読人しらす

いくちきる浜への浦のさ夜千鳥なくねにさへや霜やおくらん

津守国量（なくイ）

さえわたる此川風に夕塩の松原こえて千鳥なく也

住吉の浜をさして寒夜千鳥と共にことゝふなり

読人しらす

水鳥を

松川風ふけゆくまゝに月影をさえて塩干に千鳥啼也

道誉法師

さためなき世をうきねにこほりても下やすからぬをしのこゑかな

三善資連

秋の色はてしは冬くさのかれふのはらに春をやまたん

冬歌の中に　権大納言資藤

いと猶さむやかゝる浪のしらあはのうきすをかけて

朝見ゆるとりのふしとは

二品法親王守覚

あさからぬ流と衆生の玉ちる池の水鳥

後京極摂政家百首歌合に椎柴

中宮大夫家房

太山へと冬をしらるゝ椎柴のうき葉につゝむあられをそきく

待雪といふことを

僧正源信

あられふるかた山の松の下かけもまつ雪にかの色をまつらん

冬歌の中に　藤原雅経

神な月しくるゝ雲はおとたてゝ明かたのこる浮雲

永和元年内裏歌合に初雪

大納言経信

かくもけさ降そめし雪をみる人の年そ更にちらす

影も深

中務卿宗尊親王

いつか世の年ふけゆく浪のしらゆふかけし庭のしら雪

応永十四年内裏三首歌合に浦雪

前大納言為定女

和歌の浦や玉木の松にふる雪のつもれる年をけふそしる

権大納言経豊

あさ/\の夜わたる月を白雲のつゝみ捨いる秋の袖のうら浪

嘉元二年廣田社歌合に雪

寂恵法師

かつ雪にまとしめやまも志らん志かゆふくれとみゆる川の末

題しらす

権律師仙覚

花の色はさかりの折をすきしかなかつ雪ふりみやま山

従三位継之

柳さへ秋の名をたつの在非山まて年をへたる秋の松の色

元永親王家にて侍ける比霊鷲朝まに雪よ深く

春の色は花のみやこの心なにこゝに立ちるかなれる

志るへきはつるなりと葉とはしめなりけり

今上御製

みちをたゝ世のためしとそ君かためあかぬ御代をまもる神々

左中将　参議家豊

代々を又あまりいはたゝのまつりの松にかゝりて

正治百首歌に　鴨長明

わかれいは三世の仏の数々の大宮人の名をとゝめつゝ家

冬御歌の中に　後鳥羽院御製

一とせをほとゝきすもなく霜枯の名残のさくら花

藤原朝臣則後朝ことにならぬとしは古乃かみに志られ待つ

とのゝて清井とみゆる流れ手に年をとひてはける

えらむをいとひやいまもしとわりある色かすり

藤原秀茂

いまはさは思ひすてんとおもふ身も世はこの頃の情さそ

歳暮の心を

前大納言季顕

なにはさもありてふるさき年の暮おもはむ人のたのみなきと

題しらす

中務

かくしつゝきぬる中の秋をいたつらは春になるそ年のくれなん

清輔朝臣

たのみてもおとろへぬるよはひかな数のかはれはいたつらに

けふよひとつの数

新續古今和歌集巻第十八

雜哥中

建仁元年三月後鳥羽院に五十首哥奉りける時

参議雅経

浪のうへをたかぬる浪あらきおとにのみそよなりかしてむまれぬ

後宇多院に十首哥めされける時海眺望を

弾正尹忠房親王

たかね白のゝもしとみえし沖に数そふあまの釣舟

権中納言公雄

限なき浪路の末はひとつにて空にかゝれる沖のつり舟

題しらす

前右兵衛督基親

難波かた入江の芦に塩みちて松のこなたにくらき風そふく

眺望の心を　称名院入道内大臣

入日さす塩ひの浪の末はれてひかりそちらす浦のうち海

貞和百首歌に　前大納言實教

おきつ風吹よせて立つかくる舟の末も満てつゝ

題しらす　如願法師

わすれぬもみてや浪とともにそ里もたへにも見ゆる

承安二年廣田社歌合に海上眺望　皇太后宮大夫俊成

和田原霞てそ見ゆる沖つ浪ゆくへもしらぬつりふねさ

家百首歌に小浦舟を

風そよく八重の塩路をゆく舟もいつく浦をかはしにすむかた見え

太神宮に奉りし百首の中に眺望遠帆　鹿苑院入道前太政大臣

浦風のなかすとも見かけ霞をみるまにそれならんかすみ消ゆ

浜鶴といふ事を　祝部成胤

あさかすみ塩風けて立浪にはしる

弘安百首歌に　従二位為子

湖そやとほまりてゆく湖川の岸にて

貞治百首歌に　松山　後九条内大臣

雲のゐる梢をたかみ此みねの松の千とせも雲ゐなるらん

貞和百首歌奉りけるに

前中納言為忠

宮木もりとるもやひさしからん高の雲のみねかけし松山

弘安元年百首歌奉られける時に

亀山院御製

かさしける三輪の杉むら此松の葉や年ふる友のしるしなるらん

天高萬山遠といふ事を

大江千里

天津風たかまれるつみを流るゝはまはりの山にそをゝきかは

題しらす

平常顕

名高さは山のはるゝまにあらはれて雲井はるかにそふる松の一むら

永和百首歌に

深守法親王

高砂の松をいく代に成ぬとはしるもしらぬも鶴やなれけん

三十首歌よみ侍りける中に松を

式部卿邦省親王家にて

住吉の松の吉川見れはかさね浪うち寄るかひもひろひつゝ

題しらす

惟宗行冬朝臣

年をへて苔むす峯のそなれ松みとりの色をいはぬやはする

家百首歌の中に磯巌といふ事を

鹿苑院入道前太政大臣

年へても磯うつ浪にあらはれぬ岩ほの苔そむすもひさしき

雑哥中

後九条入道前内大臣

雲の波かゝりの沖をみてまつ八塩にうかふ夕日のそら

百首哥よみ侍りける時 山家

前摂政左大臣

わか庵はまつらみ此ならぬ住まれはこそ住よき都なれ

弘安百首哥めされける時

亀山院御製

松かけのたつかふる雲の梢より山の風も哀なる

二品法親王覚助

さらぬたにさひしき山里をさらにうきみのうきに住なれ

洞庭古松と云事を

住なれて我をわすれぬ若緑の庵の木の葉の木の下の一ことを

前大僧正道意

嘉元百首哥奉りける時 山家

中納言為藤

さひしさに松のかけなる山里はいつれとかきるへき松の梢に

前大僧正賢俊

山深く住とはなしにさひしさは世をいとふ身の心なりけり

百首哥奉りし時

左大臣

老らくの世の中にてもとふ人の来ぬをうきにはいはしとそ思ふ

大夫為右

心のみさ残ましを松の嵐の音のみそきく

永和百首歌に　後常盤井前右大臣

山ふかみ木のはのたえまもりかねて人めもかれぬ冬の宿かな

山家を　栄仁親王

これまでとすみはてし身も我山のおくにも世のうさはなほのこる

百首歌に　入道二品親王性助

さびしさをなにとかこたむかぜとてもおとをかはらで深山の里

題しらず　源義忠朝臣

住なれし人の心もしられてやかてさびしき山の奥かな

境空上人

いかにせむかくれ家にまで静かなるとも山里もなほ世の中

家に五十首歌よませ侍りける時

式部卿邦省親王

山ふかみ人こそあらめこゝろさへはらはぬ庭にすまひなれぬる

貞和百首歌に　宣光門院新右衛門督

友とみへし清きあとなれぬる松風すべてさびしき

前大納言重資

庭の松なれぬる行末かはらずは流のたえぬ山かげの庵

中務卿宗尊親王家百首歌に　前左兵衛督教定

そむきても猶わすれぬはあはれなる松の嵐の夢に吹く

山家を　浄阿上人

のがれきて山の庵やすみなれしさびしさは猶絶えぬ世もなし

よみ人しらず

いかにせむ花の庭にはちりしけは此かたさへもかゝりやめ
花ちらし頃

源信元朝臣

若深き河の桜の一もとに小松ひきうゑし千世の盛

明魏法師

三の名の桜さく山の吉野山かすむ山人のたのもしくほころひける花

山家桜といふ事を

入道一品親王永助

かすめは宋の庭の桜にたれぬすみて袖にちる花
花散やく方々にまかりにけるを

前大僧正義運

山さくら桜の木々となりぬらんひとへさきてやさ花の木のもとに

正治百首歌たてまつりける時

小侍従

あさ夕に桜をかさしてとまらぬ人をとまねたる大井さと

弘安百首歌に

前大納言雅言

吉野山に高き山の桜をみれはかすみにやよそにこそみれ

貞和二年百首歌たてまつりける時

右兵衛督直義

ちらし桜の花の色をみて山のしつくさ庭の花のさかりさ

二品法親王覚誉

の桜さくめをいとふやまのあまりさかりは山の桜花

入道前太政大臣家にて山家桜を

のかれてもすみけるかひは松風もうき世にかはる山のおくかは

参議季平

嘉元百首歌奉り　山家嵐

太宰権帥為経

侘つゝもすめはすまるゝ山さとにあらしの音そさひしき

如願法師

住吉社歌合に山を

足引の山ふところにゆきくれて松の下にそ宿るころ

前大納言忠良

正治百首歌に

いつくにも山路の苔に跡たえて蓬か末に風ふかくなる

二条院讃岐

都出て入にし松の山かけのこの葉も風にちる

松の文字をよみ侍ける

前大僧正義運

世をいとひむすひし菴の松風は我よりさきにすみける

山家を

栄子内親王

山ふかくすむかひもなし松の戸はきくにかはらぬ世のうさいかなるらん

題しらす

中務卿宗尊親王

山ふかくすむとはいはなけれとも世をそむきし心もあさし

貞和百首歌に

等持院贈左大臣

山ふかく住かひもなき世の中をそむきしこそもさはかりし

入道贈一品親王尊円

いかにせむ身を山里にかくしてもなをうき事はきこえける

前大納言公泰

尋ねきてとふ人まれの谷かけに我とむすふ山の岩のかけ道

正治百首哥奉りける時

後京極摂政前太政大臣

しをりせしひとり分入る松か下谷川風の庭もりぬらん

題しらす

正三位義重

山さとはつま木こる斧の音のみそひとりなれたる雲の通ひ道

寂真法師

岩井の水ひとりそあさけまたとあらぬ年ふる宿の庭かな

山家水といふことを

権大僧都堯尋

世のうさにかくれても山ふかくすみ人しらぬ峰の庵やむすはん

貞治百首哥奉りけるに

鷹司院按察

すむ人の心をくみて松かけに宿る山水のおとそすむらん

題しらす

後光厳院御製

あれはての庵の竹の苔にしもたちぬる袖のきる衣なるらん

押小路前内大臣

山さとは谷の岩ほの苔むして心すまれぬなから猿そ啼

暮を

前大納言為家

松かせの岩ほのとこにふしなれて心すみぬる世をそのかれ

山家なといふ事をよませ侍りける

後小松院御製
かけたかく松も山をはいてさりし友とそすめる世をやたもたむ
あけすあひて不老すゝかそめまゝに待らむ
栄仁親王
わか末の人の末をはるかにて松と見ゆる山のすかた深くして
題しらす　刑部卿範景
うき世をはいつの岑の雲にてそかくれし山のさとも神さひにけれ
頓阿法師
住なれて世のうき事や山里に住そめしよりたえたゝなりにけん
貞和百首歌に　入道一品親王尊道
いかにせん世をのかれても山里にてうき事とのみ猶そ聞

正治二年百首歌たてまつりし　三条入道左大臣
としへつる松の梢よそにしれて門田のいなは風そよくなる
百首歌の中に　後小松院御製
あき風なりとも田のもの庵にもとかへぬ穂やまたの朽ちぬらん
永和百首歌に　後普光園入道前関白左大臣
ふるさとの門田の庵の秋風にたゝかれぬる枕かはりて
田家雨を　法橋後栄
かりそめの門田の庵の秋霧も我身世にふる雨そきこゆる
題しらす　よみ人しらす
秋の田のいほの松かせにものかりかねの庵をもるさに

前大僧正果守

みなと由の唐のからやあまの宮をゆりそめあまつ宿さゝ鉾え

百首歌奉りし時田家

前摂政左大臣

小山田の庵もる賤のたけ縄はたえす引きけり我なからの時うきにたつ

住吉社に奉りける歌に述懐を

前大僧正慈玄

いにしへをおもひしとは思はねとかはらぬ心の志のふ

守覚法親王家五十首歌合に

法橋顕昭

さけしらぬ袖のつゆとはいはれてやなきはおもひの末にかゝ

題しらす

源経氏

うきよをはうとくなれども思ひすつる身のすてられぬ

弘安百首歌よみて

土御門入道前内大臣

いとゝ猶うき世に残るやかへさぬ旅の心を山すみにもなき

述懐の心をよませ給ける

今上御製

思ひやる世のなかにこそ思ひつゝたのむ心に年をへにけり

述懐依人といふ事を

成恩寺関白前左大臣

おもひのなき世にはいかてかくれにもあらて三度の道の末はや

題しらす

よみ人しらす

言の葉の道もかはらぬ種は今もむかしの和歌乃浦松

永和百首歌に　従三位雅家

色かへぬみちとてもまた言の葉やそれなからの和歌の浦松

百首歌奉りしとき述懐　左大臣

立かへり和歌の浦浪さえてこそはかけてもたのみのいにしへをまたん

嘉元百首歌奉りけるに　前大納言経継

もとりかはり棹へいさすゝむ舟かりも昔にかへる和歌の浦浪

染筆を　入道一品親王永助

あとの露代々玉ほこの道の世まていとよくふみすさせ思ひけるや

百首歌奉りし時述懐　権中納言雅世

かけてたにそよ昔に帰る世の道はかしこき跡を和歌の浦浪

弘安元年百首歌奉り　大蔵卿隆博

和歌の浦やかりねの世にも跡をたに残しおくこそ和歌と思ふなる

題しらす　三善為継

頼そよ和歌の浦浪世々をへて跡をみかさの名をやたつらむ

後光厳院御時故頓阿法師の庵に人々さそひて侍りしまかりていにしへおもひ出てよみ侍る

ありまれは数ならぬ身の枯木につかふる人もなしとそ思ふ

はかりけり　　後福光園摂政前太政大臣

勅なれは松もひさしき敷島の道たえぬみよにあふそうれしき

作り　　頓阿法師

雲井まて聞えあけゝむ和哥の浦の芦への田鶴の声は嬉しき

百とせまてまもりし哥の浦鶴　　無品親王

和哥の道やもとの数に立かへり昔にかはるわかの浦を恋ふ

葦原　　従三位行文

三代の集にあつまるとやかきをきし我かきまた此のたひのまをせし

貞和の比新後撰集よりこのかた風雅集まて六代

の撰集にあひて名をうけ給りし事をおもひつらぬ

前中納言雅孝

和哥の道あふ七十の老の波こえてひとりかきの浦なみかけける

これを新拾遺集えらはれける時続千載集

より又このかたの集ことにあひける事をおもひて

頓阿法師

玉津島入江にきよくいつる河て世々にあひぬる我やしるらん

寄毎述懐といふ事を

藤原秀茂

和哥の道や我をたらちのあとへともおもひそめてしなき此物集

住吉の神もまもらん哥の中道

同辺入道前右大臣

しけきやまにたく煙そてにおもひしらる身をなけいて

後拾遺折奏覧の時そへて奉りける

権中納言通俊

君をはなひきて海のみ人の代々のかき人の玉ひさ

ゐてせよと作るをみけれは

禎子内親王家摂津 稲り

君か代につかきあつめし言の葉をひろちりくなさ述

又

権中納言通俊

まれにと書あつめつる玉つさを見るくも風のはくれ

駿河国のちうに番て権中納言雅縁として

詠みて判詞したりしへさらしりけるをかけてつ

花そへてう和歌は源氏物語をよまさへ

奉りけるつとやまとりはかりける

源義政朝臣

らしさる言の葉はかきくもりて葉草の末とそおもはん

源氏物語乃楊名介の上ならて式部丞朝臣にあかれて

やまとりける

藤原雅朝之臣

詠み許しを源氏物語の宿所あるしにまへとをかれ

歌

丹波忠守朝臣

いそてまれなりけりて君の元かきてまつるの宿

題しらす

法橋顕昭

今はたおもとなからのあはれかひとつかひつきとなき

述懐の心を　　前大僧正道玄

我方のとき川のやまさてんまて別海のはまつ標あひのはれ葉

世をいとふ蔵ともいふまし　　心海上人

世中を蔵とはきえ出りなりかはとあきかなしみ花ちれ

治承二年神主重保すゝめ侍ける賀茂社歌合に

前大納言隆季

とふことは浮世を蔵とたのみつゝさえもしらぬ我身なりけり

正三位季経

うき世にはそこはかとなき川と成ぬるもやまさて末の川もまたなかれける

泰議侍りし比守覚法親王家五十首歌

述懐　　前大納言兼宗

のちの世をたのむ松のはしはまつはかりなりけるわか身なりけり

松本也と

従二位有世

いのりこし末のかひなき身の程をかなしとそしる我のみそしる

貞和百首歌奉りし

後福光園摂政前太政大臣

まよひこしみちにはそれはかはりけりとなりぬるすゑの世の末なれは

百首歌奉りし時

前摂政左大臣

今はたゞ世をやはらむむさしのゝもとのこゝろのかはらぬをしれ

後三条入道前太政大臣女

いにしへをきけはしとおもふ世の中をしるへなきこそあはれなりけれ

披書逢昔といふ事を

よみ人しらず

みちをしる古乃源をたつねても此乃筆乃すさひに
代の家記をみるといふことを思ひよそへて法は耳く
よみける　　小槻兼治
流れこそたえぬ跡をもていかさもかきとめし水茎乃あと
貞和百首哥に　　民部卿為明
古乃川の流れもむかしにしらぬ世をうらみいかなるやと
信正を隠してぞ月をもかきなかれぬ笙をもて
人にあらそひ侍りける小木流を
前大僧正玄円
身を定めぬ吉木流の無さきをみれの身のあはれなる世なりけり
題しらす　　雄運法師

吉野河はやくと思ひし乃世をそむきても猶又なけかるる
源光正
いかなれはおもひしかとも水の流れにせきとむるかたもなかりけん
述懐哥の中に　　源和氏
花をもしらむや松をすてて住人の世をて山の松に住をを
中務卿宗尊親王家三百六十首哥に述懐
藤原時朝
嵐ふく月も雲にもまたれさらぬ世をもいとひはてぬなりけり
貞和百首哥に　　中宮大夫公宗母
とふ人もいまは梢の嵐のみおとつれてゆく世そさひしき
題しらす　　式子内親王

あれまさりて見し世ともなりゆくふるさとはらのなさけもなし
前大僧正果守
うき世のそこにおもひしらるゝとにつけてもひかれぬ身こそ達
惟宗行範
行年はあまりにいふは松もむかしそもすてゝまたあらぬ世を
弘安百首哥に
よみ人しらず
うき世にはいかにすみけむかくれがの山のふもとの世をそ
述懐を
世をすつるみにあればそいつも我身はわれさへつらき
従二位成前
題しらず
よみ人しらず
身ひとつはかはらぬ世をとおもふともなかけにはあかなくに
前大僧正道瑜よませ侍りける三十首哥の中に
大かたの世のうきにもなくさめてつらきみのうきにをはし
法印長舜
弘安百首哥に
いけはりあらかしむかしのかなしき世をすつるもの世
法印憲實
題しらず
うき世とはおもひすてゝもむかしを我身のはて
権大納言公時
陸奥國道
かりの世のかくれかにそむくてもとめずはなれ
文保百首哥に
前権僧正雲雅
なは
うき事はなにとかはらぬおもふ世にあれはてゝいとまの松そ

大僧正道順

かきたえしむかしにかへて大宮の世のまつりことをおもひしられぬ

住吉社に奉りける百首の中に

後香園院入道関白前太政大臣

むそ松の浦の玉もしほのつらさと月なかきかけにそたのむ哉

寄松述懐といふ事を

前大僧正定助

年ふる色はかはらぬ松浦やたかきまつの浪をかけつゝ

題しらす

明魏法師

住吉の風にて数そへたまへるの松をいのりてまつ千世よ

源頼量 豊

住よしの浦の浜まつたみえてかはらぬむかしかはる世ハ

重道法師

まつ見えしかならひ成と思ふのみしらと成きむかしなりけり

貞和百首に

徽安門院一条

かはらしなむかしにかへる年月のなかくそたのみそめてき

延文百首奉りける時

前大僧正隆弁

立かへり又こそ見つれ住吉の松のみとりのうけをおもひて

八十小松かけてあまりくるしき

平師氏

すみよしのあらしそきかはなほたのむかけはなかきよたのみたまへは

懐旧の心を　左兵衛督基氏

わすられぬむかしはかりむかしのくれとしのふにも世のうきことそまさるなりける

定顕法師

夢の世をいくとせ夢のうちにみてさめぬむかしをしのふなるらむ

貞和百首歌に　永福門院右衛門督

いにしへと世はなりぬるをおもかけはかはらてのこる夜半のともし火

懐旧を　三善為秀

かへらぬは世の思ひそてにあまるむかしを恋ふる昔をみるかな

ふるくもかへらむ涙

昨日にもかはらぬものを忍ふれはやかて昔の人そこひしき

養徳院贈左大臣家にて百番歌合侍りし時

述懐　前大僧正増珍

これまてはおなしくもゐの春の花あらぬ身にしもなほそなかむる

雨中懐旧といふ事を　平貞秀

ふりにしをしのふは雨のよるの袖そほちてさらにむかしの人の昔恋ふらん

源三位頼長

かきくらしふるもなみたとおなしくは昔を思ふ夜半のさみたれ

弘長百首歌に　衣笠前内大臣

いそきたつこゝろのあさき人なれとむかしをしのふ身にもなりけり

伝き侍りし歌の中に　源詮信

思へきむかしを今にかへすよしなき袖にこそ涙なるらん

前大僧正道基

かゝりける身のうきをなにゝ思ひけん世のことわりに物にまかれて

弘安百首歌奉りける時

前大僧正實任

むかし見し人は又たれかのこりてそ思ひいでゝもかたらまし

友を

式部大輔秀長

おもひ出はさきこそあはれなれてあとなき夢の名残ゆへん

さめてし涙

式部卿邦省親王

なからへて世の友なき我身には昔への夢そ語らん

貞和百首歌めされけるついてに

花園院御製

なにとなく眺めしかこそあはれなれなからむかしを思ふ

夢乃世のまゝと

新續古今和歌集巻第十九

雑歌下

貞和二年百首歌奉りける時

等持院贈左大臣

あかつきをまちしも末のあはれをもおもひのこさぬかねのこゑかな

題しらす

左近中将公衛

きのふみし夢とそおもふかねの音に昔をしのふ暁のそら

住吉社に奉りける歌の中に

入道一品親王尊道

出る日の入あひのかねの声すれはむなしきはての音つれ

称名院入道内大臣

時しあれは横川の鐘の声すてゝ[illegible]

嘉元百首歌に

式乾門院御匣

山寺のまくらに近き月かけは[illegible]鐘の声に

新玉津嶋社三十首歌奉りけるに

法印経賢

[illegible]鐘の声

題しらす

正三位[illegible]

[illegible]夕くれの鐘のおとつれ

源義将朝臣

[illegible]鐘の声に

法印[illegible]

すのねしは声けき鶏の空晩にあかつきの明の羽音

二品法親王道助家の五十首哥に

法印幸清

あはれしはかはらぬ声の鶏のねとて暁ことになきそめける

寛喜百首に暁鶏

常盤井入道前太政大臣

いにしへのあさき鶏声は神の代の今も八声の鳥は後をそかけ

後よりおきしさる時百声は中々に暁寝覚と

いふ事をうき世の行へ

後小松院御製

この比は鶏のつくるを告渡く秋とはかなくあかつきの夜

百首哥奉し時　前参議通敏

鳥の音にしのひをなすいかにかなしく秋のよのさきもなく明しをきね

二品法親王覚誉家未備して哥合に待ころを

法眼源意

起の鶏におきてしすけてを鶏といふ声そやよもの名残をしまん

題しらす

前大僧正源守

明ぬれはまつかなしき暁をいつしかやかるゝ鶏そうかれし

賀茂雅久

あかつきの鶏のねとにそありてけるを鶏やなりけん

梅元吉

明のなこりかけのさはりのゆふつけの声ありしゆるさでかなしかけ

梅室村

清見かた夜ふく舟をこき出る戸のあけほのを島乃鶴やなくらん

暁鶴を　　入道前内大臣

いまそ知る松のやとにおきゐつゝなくなる田鶴の八声は

弘長元年百首哥なり

従二位行家

あま川の子をおもふ松に鳴しより暁ふかく声や鳴らん

正治百首哥に　　式子内親王

なく鶴の松にふしても夜ふかくに霜の上にや声なかるらん

百首哥奉りしとき浦鶴

権中納言雅世

いくかへり我世ふけぬと子をおもふ松のうへの鶴の千世の声

谷松鶴といふ事を

法印慶運

その浪の月の上には松嵐に鳴鶴や松にすみけん

守覚法親王家の五十首哥に眺望を

源師光

なかめやる浦をはるかにこきいてゝ明ゆく空に鶴の鳴なる

文保百首哥に

弾正尹忠房親王

いそつたふ白浪の声や夜ふかくあかつき天の原山

弘安百首哥奉りける時

花山院前内大臣

霜すさふ影の寒けき月は夜深き霜の色かな

延文二年百首歌の中に夜槿

権中納言為重

かけてまつやちよのためとうゑおきし松の

松の百首歌に小庭竹を

権大納言為遠

呉竹のよゝに移れる風の音にことゝはゝやとうちなひく

竹為師といふ事を

後小松院御製

九重や庭のおかえ竹のすゑの代の君が千とせを

権中納言雅縁

禁中竹を

むかしよりきみをかさぬる河竹の三代にあひぬる身こそうれしき

百首歌奉りし時

二品法親王道朝

代々の君かさねてうゑし呉竹の

永和百首歌に

崇賢門院

脆そふ庭の呉竹うちなひきすゑの世かけてなほ繁るらん

里竹といふ事をよませ給ける

崇光院御製

いつまてか里の名に松に呉竹のすゑの世をかさねん

八条入道前内大臣

松の一もとを

長くしもかけてみる世の竹の

弘長百首歌の中に竹

前大納言為氏

呉竹の末葉にむすふ露の数しらぬ世のゆくゑをもおもひみたれ

けふの　後押小路前内大臣

うき世にはしけきことのはも猶おもひなくさむくれ竹

前大僧正浄守

くれ竹の庭の雪をや葉かへしてさらしけき陰なきかすかならん

後一条前関白左大臣家にて旅宿の人を待

源兼氏朝臣

泉河やうき人の住居くらへはあれまさるらん

貞和百首哥に

後三条前内大臣

さゝ浪や志賀のから崎松ならて世のそむかしの古き都のあと

百首哥よませ給ひし時

尊良親王

住人もむかし語りにしておのれひとりやあれまさるらん

古寺を

権大納言資藤

立のこりて二の塔そあれはてゝ昔をしのふかたみなりける

延文百首哥に

権中納言為遠

跡みてもすむかたしらぬ庵の桜井の清水のみかけす

後小松院御くしおろさせて五十首許侍し

まつりことに蕭寺月を

入道一品親王永助

松の戸やさしもおもひのすむころも古郷の月を影のみぬき

古寺鐘を

権大納言通守

きこえてはゆふ暮ちかき山寺の入相のかねのひゝきのみ

狛秀房

いつまてこの世もさそやと思ふ鐘の音をもきゝなれぬ身か

日吉社へ奉りける歌の中に

権中納言雅世

みてしは鐘の音と聞なれて今はたえたる古寺

題しらす

後八条前内大臣

日もみえす月はさえて白玉のみたれて落る布引の瀧

布引瀧を

菅原基隆

津の国の生田の川の水上やみつの布引の瀧

名所述懐といふ事を

藤原隆祐朝臣

この世にはあととゝめすも住そめし河の流の行方なりとも

嘉元百首歌の中に橋

万秋門院

かつらきや久米の岩橋しるしあれと又あひ見ることのかたさを

弘長元年百首歌によせ

前大納言為家

ふる河さへ舟橋かけし道とてもなかき世をうけてわたる

旅をよめる

丹波忠守朝臣

行末を猶たのみてもかはらぬをさのみ袂に流そふらん

世路山河といふ事を

惟賢上人

都乃雲川世の流をへかゝるしき世にたかひを海さとし

家百首哥に上陽人を

藤原為忠朝臣

いたつらに六十の春をゝくりつゝ文の萬にしをりて

反魂香の心をよめる

従三位頼綱

見そめつるおもかけなれや世河のけ此煙のうちに見えけり

陵園妾

前中納言為秀

とらはれの松の戸ほそ代きえてあかぬもきのうへの露

屈原

二品法親王覚誉

露霜のきえて文字は拾山の中にそ此松そひとりさわける

四皓

源業清

数ならぬ身を高山に入りぬとも又おもひやる世にそ出ける

白河殿七百首哥に隠士松山

前大納言経任

道ありと我君の代に出てこそ山の松をはすてしなりけれ

仙家の心を

源道政

山ふかきすみかもあはれ代々をへてそ世のかたちをみ

窮し夜

中務卿宗尊親王

よそ見といへ松の山かそ三代まてもふるしる玉を何か見る今

哥合に仙家の心をよめる

前大僧正慈鎮

いにしへの

後京極摂政前太政大臣

和哥の浦の葉にかくれてもかひなしや世をすてかたき人の心を

題しらす　前大僧正慈鎮

山河のなかれて末はかはるともたえすやきかん世中のおと

雲の上をかけはなれにし世中の清き流をおもひこそやれ

山里に住んとおもへとかなしきはうき世をすてぬ心なりけり

いかにせん世をそむきぬる身なれともなを心には思ふこと有

建礼門院右京大夫

なにとなくなかめしそらをかこつかな春のかすみのたつにつけても

刑部卿範兼

ならひそこなふかひなき世はなかれけり大淀の浦にふねよせし身を

すみよしの雲のはるけき浦なれはなかむる方のなみ(?)よ

題しらす　殷富門院大輔

なれて見し年月なかき名残とてうきにもつらきこゝろなりけり

秋の夜のかきりもしらて月をみるかな

後鳥羽院御製

みる人のかすならぬ身もすめは月の都に

建保四年内裏十首哥合に　八条院高倉

いつくにも世をすてゝまたありあけの月の影

月哥の中に　法印浄弁

うきはしのかけてもありや露にやとれる月かけ

題しらす　藤原隆祐朝臣

かすめくらくなりぬ天原もかゝる事そなくさめける

雑歌の中に　土御門院御製

いかにせむ我身をおもひつゝあはれ何事と夜なり侍り

弘長百首歌に夢を　常盤井入道前太政大臣

ぬるかうちに百とせをみし夢さめてかはらぬ世をも憂となり侍り

嘉元百首歌の中に世を　前中納言雅孝

なかきよを捨しもあはれにかりの世のはかなき

弘安百首歌に　前大納言為兼

たのめとも浅きこゝろにすまぬ世をたのむ人こそあはれ

題しらす　源頼之朝臣

さかゆくも世にはかはらぬみちなれはなをたのまれけれ

短歌

桜のかけをわかるゝ歌に　大納言経信

かゝる月のはなよりも　ならひのおもかけを

うらみたつこゝろをしるも　いはまのかみをは

あさ世舟さかのほるにも　はてしなき千代へたり

みちをとひみかれのはこゝろゆけは　あまの川まて

なかれゆくこゝのみちのそのかたく　のこるたく

きくかはこゝのをちのみ　わかれてくるしみ

まけぬも　我ぞとつくも　ときめしと　松ひく柱けい
いはやさし　九重雲を　見はらせん　あかにすゑて
気つまりて　芦のねの　吹みちの　香乃生ふに
家のかせ　芦北屋の　つまをなす　衣も山家
聖賢の　撫風い益を　たとへりし　庶乃たく禄を
きてわし　世のうの罪　どひやくし　八雲の色の
ありけるて　なす殿の名を　うけがたきは　古ゆ松風と
どひきの　人を守りて　松のかゝりて　法の事を
なにわすが　かつて時の　なりきみを　いはよせも
かつり草　一般とり　おもひりしに　草乃生ひても
泣きの世　色の言を　なまあらぬ　秋の色の

ふくとあつかふ

百首歌の中に述懐といふ事をよませ給ふ

後小松院御製

あさみどり　すみれをと　きさめを　やまとぞ
秋のまくを　松はひきた　酒を友とき　あきの月山
いはねより　ところなたり　見くもなく　時さえやけき
袖代わり　身をも経はの　するそあて　どふぼこあ
いまれ　折れなと淺く　なりゆきと　こゝにたかれ
世のこゝろ　浪をたてむ　名をうけく　我らが山の
松のねぶれ　年乃今すの　つきはれとも　民をすまふ
一二と言　たふとまれ　水にとりては　なかのやまた

あはれとて されと作り そこまつ渋 世をも松の葉六
ひさかたの 京よりんと あふさき川 千年乃月影
いくとせか 色にいろかへて かはらぬは 世ともあまりの
君か代の 寿松はさそ なりにけり 常盤松は
すむまつも 八隅しるふ ちとき代の 君あふさを
あらたまの さやの中山 みつくり ともにちかひを
たかの 松乃みとり草 ゆきまよひ けりは花さく
万代の 代々とかはらぬ なけきの池の 月の月には
いくとせか ちとせ夢さめ かへして 影をとめても
松かえの なきはあさと ちよまつ 物のなからも
かくれ山 松の備への 玉藻とも 久にかはるよ

たかさこに 色をかへぬ 志ら波乃 う野の月は
みなせ川 いくとせ ら川を秋く 高砂の松を
きみか代の 世々をへぬれ なか川乃 いとはなく
又年も 心をわれを 君か代は 心をもせん
こはるまで うつ河代の いそかねて 林の木すゑ
ちりのにし その松をを 松かねね 葉すさい
露かけの ひかりもみゆ らうかんはへ 玉まさ見川
いはなる かけのこ河を 舞はおりめかう

反哥

松か年千代はいつ南てもわか君みかへにたなくさの紀
源猶光園松政めの重作く也此の源義将朝臣をと

過年月なれ侍りし事など申て侍りし返事に 小

権中納言雅縁

春やまた わかれし程を 年ふりて 猶まよふらむ
なをひとり これもさすがに 老の露の めくりあはまし
かとみえて 一さかりなる みちのくの 老をたのみて
むかしを 忘れたてしい なを竹の よゝひさしくて
ふるさとの 小野坂なる かけしあを 柳のはかり
名のみあれは 春にはなれて 花やとをちへ 色にまさらを
身ふたつに 世をへきかたの 夕霞 あはれをたにも
玉も露を たか紫の 冬草かな 涙をのみ露
きみさかり 深しからて ちかうてきても 世はてもかはらし

吉野川の なかれの末は さしも川を あれしと桂木の
月けれは 雲にうき浪 うらしく これふかき梅
ゆくえなく たゆたふうら 松木の浦の 松かさそ吹て
松ともしれ いとたかりを 浪のうら風 のこらとなき
流をそ滝 さとの世の 尋ききみの 代々かけす
名のりそ 或春は旅をも 老のこゑやまん

浄土宗のいへをよみ侍ける

頓阿法師

あさ日かけ うき世はやみに そそくめくく 光をまちなる
ての浪の 流れの庵の 秋の夜の月 雲のはれ
山まさ くもりは春は 花のひを さえ侍る法の

いつしかは　やまと川にも　あまりけん　ゆるかなき哉
さらにそ　くれはさらに　なかはひけ　かそへもよ哉
桜花をしへ　竹林を　きよ川かせい　めぐみのこゝろ
世をわたく　かいまためぬ　ゆきりいそ　中ゆらふ
たりかれ　佛のみちを　かそへきは　かれのちせ
ためや花ぬ　しるさらかの　志らさ山見　すゑのはまよ
むすおきさく　さそはれきま　せて川の　おくみてもに
松の行を　すれ契しそ　契りきた　そをのかたの
世中をも　あきを経て　あたりなき　あはれもみい
うき身を　思ひ渡めぬ　このまちに　かめるよする
いつはりの　ひるきねい　いつかせむ　さそかさいとの

ひとすちに　なかひかそ　みちへゆく　法の道を
むすひつは　すとてみそ　そのみちら　いつ世りけ
流れを見て　うつれかやそ　心とれかひ　浪ふかく
おもひれく　花さく野の　つかさをみき　つもそかつ
人のこゝろ　もとの世に　ちりくも　老そわひ
すゑの世まで　まさて楼　ひかきそ　たえもまう
花を見ん　さくまのかな　契りなり　一たひ十た
心を寄せい　もゆるをく　さかりて　すさき風は
やまさとく　ちりふ花は　きえひてそ　老の国に
うれりらく　そのき数を　こひ子の　風のたつる
なかをおもひ　さか流もちる　なけきとも　浪のちさを

はるかなく　志賀のうらはなみをわけ　みわのこゝろを
ゆふ暮　かすみのはまを　きてなり　野辺の清水
消えはてと　とはれんの　ねりけきは　きえめの哥の
花よりの　名残につつ　おもひけて　清しむかしを
をもれと　おきめそあれ　かとひ竹の　きえぬひかりは
くもさねて　竹と月をと　春そなき　やまきはみねを
志のをきに　とふはのかは　きりかね　かふさ清は
うまつきの　んとそむかし　むらさ紀乃　雲のむかしを
ありなる　風かきも　いと竹葉　ふかみ聲は
さ光花　すそは浮世の　実をきえ　やとるもすゝ
ひさけなん　月のおかれも　忍む事を　折りへの月をそ

[illegible]やうらん
折句哥
十三夜といふ事をよませ給ける
後鳥羽院御製
とのゐやうら月のさやけき暮すくし　山の端風
すゝむらし
桜塞　使資平
枕そふ三輪の山のとら代をそかさしけりけん志らへふ
このうてぬとさきのさ
二あ秋もといへはつきさる秋の席の青とふ雪のなるさ
物名
すゝれ
俊頼朝臣

ちるをとおもふ身さへや桜への志るへの山路日をもそへなん

けしきも見え　　　　澄覚法師

冬きてそ志られぬ水のをとたえしそことも知らぬ松風そひさ

正治百首奉りける中にかすめ

皇太后宮大夫俊成

わか沢の池のみきはゝなかめかきもとめつ秋の夜の月

あきへのかとりも浪ありみせいかきあけたき紅葉とは

袖をこそ世をはかなみてむすへ露のやまよ世をそかなしむ

後頼朝臣

いつ袖は涙にくちてかくかせもいそうさめにかゝと見ん

かはわかき　　　　後八条入道前内大臣

伊勢島や一志の浦の塩風吹くるよりこそ玉はちりけれ

ひのえ　　　　曾祢好忠

あすか空や天つ手向とひはつらんせる白雲をさやまそ知る

ちしとの　　　　前大僧正慈鎮

秋のはなをりてみたれと松虫の宿とし志けはなつけそ荻の上風

誹諧哥

百首御哥の中に　　崇徳院御製

子日すと春の野ことにたつぬれは松にひかるゝ心ちこそすれ

題しらす　　　　賀茂重保

あやしきも風のとかぬる梅かゝにをらぬ袖さへうつりぬる

灌佛のこゝろを　　　　前大僧正慈鎮

百様（ヒチ）のかずにもみあまりの心あらはれたりけるに経の文をとりて結ひすゝめける
人々あそひゐたりて隆源法師にかはりて結ひつかはれ
かゝりけるとて（らせても）
俊頼朝臣
むかし義の結ひし枝の葉のそれぬ津の葉はかゝりける
此光の山下かくて生れて言ふの事侍りけるに
天さにいとゝへしと心うりかゝりける人とて
あそひ言ふは結ふとて語ひつけける
僧都親教
葉と本と佛にするといふ事とみなへしこそ流れ
ちるさとりのちるにはなをゆく
能阿法師

枝の葉は露よりさきへちるものをなとゝめぬ生の身那
長月のころ菊の花を法印静賢かもとにつかはすとて
よみ人しらす
あまた世を菊のかはりにしらぬかな花もかはらぬ人もかはりと
とりかへし露のまとはるをしらなむ
三条院女蔵人左近
信濃なるやとこさかをうけの白露はみるたまとこそゆへをかすめり
冬のころ高野に住侍りける信のゆふへに雪をみて
空れは
よみ人しらす
さむきかな氣をいけるをきけりう結ふさのこえはかなし
題しらす
深観房

あはれなりやおなじひさしのすき枕ひとりぐくにたくひなき身とは

恋哥の中に　　清輔朝臣

うしときくねのいふかひなきをもふくらむあやなくも見えぬ恋かな

大原へゆくとはなしに恋わびやせし綾のぬれ衣かけつゝ

寄笛恋を　　前中納言匡雄

拝ちひさくてもへさかりをやとどひまも思ふはかりん

清輔朝臣まよひてきこえしたかふらむ装束

きよりきこえけるとこそはにけらしとて

左京大夫脩範

為備をもしまやすらそいはするあつまぢのよするをかけつゝ思ふ

清輔朝臣

歌

我をいさめきはなるを杖とぞ思ひはるかなるも

源通清

今ののちもかぎりゆきてかきつてる書や

待ちを考へ付けたはきこえけりなれは

藤原朝家

すゑなりとぞおもふはなさけの律の四方にありもなりける

あひおもひをかけ君のなきこたへかねてゆくすゑなりと思ひつる

大蔵卿祝村

りとぞ

もやもつ思ひをかけといひつゝもゆくりすゑのなきもやさしき

絹ならで囲ひ待つに日数もてわすれぬ為の

祈まかせの時雨にかへるとそ思ひけるかな

藤原経衡

あはれと祈る心はいかにかはらぬ松のみとりも色そふらむ
人の心をいひをよせけるに有けるに先帝の御時にて
大中臣能宣朝臣
世の人は海の松かれとなりぬとも立てる名をも
末の世まてそあり経へき

新續古今和歌集巻第二十

神祇哥

夜もすからかり世はゆきて見し山のかひありし世をまもる神

二の哥は住吉の御哥となん申傳へたる

いつまても君をまもりやいさなひし海の底よりうまれこし神を

さ此哥は玉津嶋姫の御哥となん

我たのむ人を守らす一枝を吹なすとも風はいかゝあるへき

これは小野の御哥となん

大神宮にまうてて侍りける時千枝の松をよみ侍りける

勝定院贈太政大臣

世をまもる神のちかひもあきらけし千枝の松の枝はかはらし

文保百首奉りけるに

後照念院関白太政大臣

秋津洲やまとの松の年ふりて萬代ならはまた君かため

神祇を

達智門院

神風やいすゞの川のとこしへに流れたえせぬ世をもまもらむ

貞和百首歌に

等持院贈左大臣

あまてらす岩戸を出し朝日より照す神の國そさかふる

前中納言為忠

いすゞ川きよき岩根のなかれのたえぬ世に文かはすしも

社頭述懐

従三位雅家

たのみこし神のめくみをかさねてそ世をは神代の神も守らむ

よみ人しらず

神風やみもすそ川の水上をすむかきりとや守るらん

神祇歌の中に

勝定院贈太政大臣

ともしひの光は玉とてらす世のわか國をこそ神はまもらん

大納言師資

くもりなき君かよのかゝみとそあまてる神のかけうつしける

家にて三首歌よみ侍りし時

左大臣

石清水なかれてすめるきよさかなかれそうけくむ君の世をやすき

千五百番歌合に

従三位保季

君やとそ神をあはれといひし水からもいひてかなはぬ御祓なりけり

柿後経朝臣家哥合に祝のこゝろを
よみ侍ける
神代よりかはらぬ流を石清水千世のためしとくむ人そなき
建久元年十二月石清水社哥合に
従為頼後御製
八幡山さかゆく峰のしめのうちにかはらぬ百代と松そ吹
寳治百首哥に寄社祝
入道二品親王道助
治まれる千世をもいのる石清水流れもきよき末そはるけき
後法性寺入道前関白太政大臣家百首哥に
従三位頼政
あさからぬ契をむすふいはし水たのみそかくる末のなかれを
前大納言経房家哥合に
紀行頼
君か代はたえしとそ思ふ石清水千世を八千代を神にまかせて
治承二年神主重保すゝめ侍ける賀茂社哥合に
述懐　法印静賢
たのもしないつかはこゝろゆくまてのむかしをおもふ神にまかせむ世
住吉社の幣使にてまかりけるに三条の宮にてはしめて
賀茂にまうてゝ下の御社より上の御社に詣侍り
まうてかよひけるに百度詣したる里に
けふのあゆみをかさねてそ思ふかゝる心のみなれは

松もいはまつ　皇太后宮大夫俊成

むかしいはりたえず神うけてそれかゝ賀茂の川浪

神祇の心を　前参議雅有

神もなほちかひみたらし川水のながれを世といのる哉

正治百首歌に　信實朝臣

千早振賀茂の河波立かへりなのみそまひなかれぬる哉

賀茂社にまゐりて三か侍ける　権中納言雅世

君をゆる賀茂の河風世を経てもとしふるかけもはるかなるかな

題しらず　賀茂秀久

君をまもる神のみたらし川きよく契りそおける代々の末まで

所あまたつらなるむかしを思ひよりて神やまもる世をうく

大江茂重

嘉元二年伏見院に三十首歌めされし時神祇

権大納言俊光

君が為神のみむろの山の榊葉のさかえんことをまつ人やなれ

神祇歌の中に　祝部成久

神をうやまふとてかけしめ縄なる春日の光ぞまつ人

永和百首歌に　後八条入道前内大臣

ちはやぶる神の山にも松風に神代の松の緑とは

皇太后宮大夫俊成

とへかへ結ふる事をたのむ人ぞある

権大納言為遠

ありとある聲をかすめるおとろへてやかすかの神もめくるらん

藤原為邦

弘安百首哥に

昔より名をさへかけぬみかさ山いくよの藤の下葉なるらん

百首哥奉りし時　按察使公保

みかさ山よもの藤なみ末葉まてかけてそたのむむかしのめくみを

春日社に奉りける哥の中にその名も飛鳥井雅縁に社

にたてまつる長哥のかへしとて

権中納言雅縁

かすか山かけわかつ神のめくみのむかしより道をまもれる

前大納言教良

題しらす

祈れたゝその名もしるきあきらけくや神の神代の文字

後福光園摂政家の哥合に吉田祭

正三位兼熙

百とせを千世やつもりの霜をへてたのむも田中の神のめくみを

治承二年神主重保すゝめける賀茂社哥合に

祐盛法師

やはらくる月のひかりにくもらすはむ世のやみはなにか迷はん

月哥の中に

前大僧正慈鎮

木のまもる月を光をやはらけて神さひわたる森の秋風

題しらす

栄仁親王

志賀のうらや風もしつかに神代の波をたゝき

嘉暦二年内裏哥合

前中納言運房

八百よろつ神のちかひのあまてらす君か御代々の代々のしるしは

続後拾遺集奏覧の後法眼行済かもとへ申つかはしける

法印宗助

和哥の浦に海士のひろへる玉そとて三代の集のことの葉なれは

君のみかけの代々のしるしをあらはしてみる

和気種成朝臣

法のためのきみの末かけは又ときはなるこそいつれもいろ乃まま

麻苑院入道前太政大臣家にて人々に三首哥よ

見るから時寄道祝を

前大僧正良瑜

すへらきの世にみえしうき世の山をそれいのりもかはらぬ代々と

心様なるに代々の哥の中に

入道一品親王永助

海のうちに入神もひもときて君かためすゑもつきせぬ

松のもとの事を

前大僧正果守

君かめくみ三熊の神山のあそ雨ふるもとのまつのちかひに松そかはらぬ

貞和百首哥に

後三条前内大臣

しきしまのみちのかなつるゆくすゑまてやいはふ今日の神杖

神祇を

一品法親王尭仁

大君のやしろに祈る陰をかへしみよの末にちよを三熊野神

遠所より日吉社に奉れ給ふ七首の歌の中に

土御門院御製

ながれてもひさしきのりのみなかみはかけてたのむのかはたえじ

松かけ社にまかせつゝ奉り

法印經賢

空にしも星となりてはあまくだり七の社垣

後法性寺入道前関白太政大臣家百首歌に

神祇

俊恵法師

さゞ浪やひよしの宮のみしめなはいかにたえせぬ七の數哉

松の宮を

法印覚全

八十まで七の社にさゝけこし今の心は老のなりけり

寄月神祇といふ事を

前大僧正行雅

あれたえし天の岩戸もあけにしか月の光に神のめぐみを見る

承安二年廣田社歌合に述懐の心を

六条入道太政大臣

言ふまではかぞへつくすとおもへども廣田の神のまもらせん

神祇の歌の中に

中原師光朝臣

日の本のむかしのあはれ光宿りけむかけをおふきて此まつ

弘安八年十月住吉社歌合に述懐といふ

事をよませ給ひける

亀山院御製

すみよしの松はなにをたのめや二代の御よにあふ浦なみに

前大納言為世

君かため縁ふかくも年ふりて三代にあひぬる住吉の松

契しれ

土御門入道前内大臣

いくとせをつもりの浦の松かえに神代ひさしき風の音哉

等持院贈左大臣

あゆみをはこふすゑてもしけきまてに浦の住吉の神　續拾遺神祇

住吉社にたてまつりける歌の中に

成恩寺関白前左大臣

さりともと祈る事を住吉のまつはひさしく成にける哉　新後拾遺

山里の障子の絵にすみよしに社書たる所

後照朝臣

住吉は神さひにける松なれは深き緑も枝をかはさむ

寄社述懐といふ事を

津守国冬

代々かけてかくそたのむ住吉の松のみとりのありきを神につけて

百とせあまりの春としるし神祇

雅永朝臣

玉ひく海をわたるも能いてちひろまてかくそたのむ神祇

此集撰進せられし時和歌所の開闔になさるゝ事をつかうまつり侍

権大僧都堯孝

なか浪の世に和歌の浦なみつゝ世々あふぐや浪の神もうけさき

麻苑院入道前太政大臣家にて人々よませ侍りし
て三十首歌よませ侍りし時述懐

権大僧都堯尋

我までは三代につゝく玉津嶋神もあはれみのめぐみをもかけよ
三代成ぬる事は我身にしもたまはりしなりとぞ思ひ給へし
ごとくにて侍りし事なり

麻苑院入道前太政大臣

我も又三代の人を三代までもなれにし代々とあはれみそみる玉津島姫

應永廿年新玉津嶋社造替の時権大僧都
堯孝すゝめ侍りし百首歌の中に社頭祝言といふ
事を

権中納言雅縁

いすゞ川にごりもたゝぬ我君の代にすむべき渚の玉津嶋姫

文保百首歌に

後光明照院前関白左大臣

曇なき代々の光をうつしてや猶てらすらん世を玉津嶋姫

新玉津嶋社歌合に神祇

権中納言為重

ゆくすゑのしるしとすゝむ代々をへて流れたえせぬ玉津嶋姫

後福光園摂政前太政大臣

君がためむかふ敷原の都より近き宮ゐそ

玉津嶋姫